
暗き望み

NYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗き望み

【Nコード】

N6688L

【作者名】

NYO

【あらすじ】

ある少年の描いた夢は、理想論ではなく、現実として達成できるものだった。それが善か悪かは別として・・・

↑ 1 最悪の出会い（前書き）

この小説は作者の処女小説であり、作者には文才がありません。それ以前に作者は文系ではなく理系です。

主人公最強物ではありませんのでご注意ください。

また、似た名前でものごく有名な方が何人かおられますので、その方の小説だと思っている方、名前をよく確認してください。

それでは本文をどうぞ

1 最悪の出会い

夜。

辺りは闇に包まれ、月明かりのみが道を照らす。

左右には森が広がり、聞こえるは、風で木の葉がざわめく音。

その中を私は逃げていた。追ってくるは山賊。数は三人。

汚い容姿、不快な声。捕まったら終わりだということを容易に想像させた。

幸い、足には自信がある。少しずつだが相手と差がつき始めたときだった。

ガッ

私は転んでしまった。痛い。膝をすりむいていた。足をひねってしまっていた。

それでも私は逃げようとした。しかし、立ち上がったとたん後頭部に衝撃が走る。

私は地面に倒れこんだ。

「おい、おに傷・つ・たらど・するん・」

「わ・わ・い」

声が後ろから聞こえる。だけどその声もぼやけている。立ち上がるうとするも手足の言うことが聞かない。脳震盪。その言葉が頭に浮かんできた。

「で、こいしどつする」

はつきりと聞こえてきた言葉は、私の人生を左右する言葉。
男は無造作に私の髪を引っ張る。痛い。すぐに振りほどきたいけど動けない。

「なかなかだな」

男は頭を回転させて私の顔を覗き込んだ。そして、私の後頭部に再び衝撃が走る。殴られたと理解するのは難しくなかった。

薄れ行く意識の中

お父さん、さようなら。

意識は闇へと沈んでいった。

side???

それは月の綺麗な夜だった。今夜の夜食を収穫して帰る際、私の耳に普段聞きなれない雑音が入る。
音は次第に近づいてくる。

足音。音から走っていることが分かる。森には障害物がなく、音を聞き漏らすことも無かった。

奴らか？

私は臨戦態勢をとっておく。呼吸を殺し、気配を消す。手にするは一本の剣。

だが、それも無駄になった。規則的なリズムが崩れた。

転んだのだろうか。警戒しながらも私は接近を試みる。私の足音は木の葉が消してくれた。

目に入ってきたのは、山賊の類と転んでいる子供。転んだ子供は逃げようとしないう。いや、逃げられないのか。足を押さえている。

立ち上がるうとした子を山賊は殴る。その一撃は少女を地面にたたきつけた。

手加減なしの一撃。子を動けなくするには十分すぎた。

山賊は髪を持ち上げた。その時、本当にわずかな時間だが、その子の表情が見えた。

土で汚れた顔。その表情は暗い闇の中でも鮮明に見えた。

生きる希望をなくし、全てを受け入れた顔。

私の一番嫌いな表情だった。

私は近くに転がっていた小石を拾った。そのまま山賊に投げつけた。小石は風を切り裂くようにまっすぐに飛んだ。

速度、角度、ともに絶妙だった。

そして、吸い込まれるように当たった……子の後頭部へ。

子は崩れ落ちた。気絶してしまったようだ。

「誰だ」「どこにいやがる」「なにしやがった」

三者三様の声があがる。こちら側が見えないらしい。木には隠れていないのだが。夜目がきかないのだろう。仕方ないので近づいてやることにした。

近づくとつれ、相手の姿がはっきりと見える。みすばらしい服からも悪人だということが分かる。山賊がこちらを警戒している。

「立ち去ってくれないか」

手身近に用件だけを告げる。もちろん立ち去ってくれるはずがない。案の定、男たちが反論してくる

「」「質問に答えやがれ」「」

・・・思考が停止した。

返ってきた答えが私の予想の斜め上のはるか上空を通り過ぎたから。それに、中央にいる君、姿を見せた事でその疑問は解決しなかったのか。

「魔法を使ったのだ。名前はレイだ」

もちろん偽名である

石を投げたと言わないのは、魔法が使えると言ったほうが脅えやすいからだ。

決して恥ずかしいからではない

相手は剣を抜いてきた。奪ったであろう剣には赤黒い染みがついている。染みは古く、年季を帯びていた。

話の通じる相手では無い。それは出会った時・・・いや、無力な者を追いかけていた時にはわかっていた。それでも、話しかけたのは甘いのだろうか。

私は腰にしていた一本の剣を引き抜いた。

この剣は私の唯一の武器だ。両手用の剣は長く、持ち手の背を超えている。一切の遊びも無く、両刃で斬ることに特化した剣。

「い、いい剣じゃないか」

「どうだ、それをよこせば見逃してやるぜ」

月並みな言葉。

多少は脅えているが、欲望が勝つたらしい。この剣を狙っている。無益な戦いは避けたいのだが。

剣を構える。剣先を相手に向け威嚇をする。相手もこちらの意思に気づいた。

木の葉がざわめく。月は雲に隠れ明かりが薄くなる。

辺りは、この世に自分たちしかいないように静まりかえっていた。

山賊の一人が切りかかってくる。歩みは鈍く、止まっているかのように見える。振り上げる姿は隙が多く、見れたものではない。

だが、その表情は自信があり、自分が強者であることをあらわしているかの様だった。

敵の攻撃を最小限の動きで避ける。敵の剣は私の脇を通り過ぎ空を切る。

切り上げに注意しつつ、から空きとなった腹に蹴りを入れる。

「ゲフウ!？」

蹴りは見事に鳩尾に入り、敵を飛ばす。

飛ばされたほうは、他の二人の足元まで転がっていった。

「お、おい、しっかりしろ」

気絶したか。私は歩を進める。足音を消すことはせず、むしろ聞かせるように歩く。男たちはこちらをおそるおそる見る。

先ほどまでの威圧は無く、脅える小動物の目。

再度私は声をかける。抑揚はなく、冷めた声で、

「立ち去ってくれないか」

そついうと男たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。自分の獲物を持って行くことに関しては評価してもいいだろう。周りに他の気配が無いことを確認し、私は剣を収める。

後に残ったのは、子供が一人。

背は百五十弱。髪は茶色。年齢は十四歳くらい。

放っておいても死ぬ心配は無いが、男たちが戻ってくる可能性がある。

幸いにも家は近い。

「しかたないか」

私は子供を右肩に担ぎ、左手には収穫物を持ち家に向かった。

雲に隠れていた月も顔をだし、木の葉はまたざわめく。

私は闇へと帰り始めた。

side 子供

目を覚ますと私は見慣れない場所にいた。ベットの上。古いベットは、私が動くたびギシギシと音を出す。

「ここは何処だろう」

木でできた家。古い家だが趣があり、壊れている場所も無い。大切にされていることがわかる。

右には、仕事道具であるだろうナイフがところ狭しと並んでおり、左には窓がある。

ズキツ 「ンツ！」

後ろを振り返ろうとした時に、頭に激痛が走る。

皮肉にも、それが昨日何があったかを思い出させた。

「そっか、私襲われたんだっけ。・・・ここは何処なんだろう？」

窓の外には森が広がり、小川が流れている。澄んだ水は美しい音を奏でていた。

視線を戻すと、足に包帯が巻かれているのに気づいた。

「この人が巻いてくれたのかな？」

ギイイイ

ドアが開き、人が話しかけてきた。

「気がついたか」

黒髪で蒼い瞳の青年。背は百八十強くらい。服の上からでも体が引き締まっているのがわかる。顔立ちは整っており、右目の上に三センチくらいの傷があった。

年は二十歳くらいだろうか。

この人がたすけてくれたのかな。なぜだろう、初めて会ったはずなのに、私はこの人を見たことがある。

「ふむ、まだ気が動転しているのか」

青年は淡々と話を続けていたが、私は記憶を探っていた。

「昨日、君は襲われていた。私はたまたまそこを通りかかり君を保護した。ここは安全だ安心してくれ。」

そついいながら手に持っていたものを床に置いた。私は青年の言葉を聴かず記憶を探る。あれは確か母の部屋の写真たて。幼い頃の母の写真。その隣にいた母のお兄さん。大きくなればこのようになるだろう。

「まずは自己紹介をしよう。私の名は」

確か名前は

「ノ『クリフ・ラビエルト』」

その瞬間、視界が反転した。先ほどまでの暖かい空気は一変し、殺伐とした空気となる。今、私は天井を向いており、私の体の上には青年がいる。

手は足とベットで挟まれていて痛い、首に添えられた冷たい物が私の全神経を奪っていた。

何が起こったか理解できなかった

わけがわからない私に青年は口を開いた。

「なぜ、貴様がその名を知っている」

¶ 1 最悪の出会い（後書き）

誤字、脱字大歓迎です。

そして、誰かキーワードの増加方法（三個しかつけられない）を教えてください

¶ 2 不思議な人（前書き）

とりあえず二話までは投稿しておきたいと思います。
小説の長さは、このぐらいで書いていくと思います。

それでは、本文をどうぞ

『2 不思議な人』

クリフ・ラビエルト

十年前、私が捨てた名だ。その後はノア・エミリと名乗っている。

今ではその名を知る者はいないはずだった。

しかし、目の前の少年は捨てた名を知っていた。

どういうことだ

私は少年に問いかける。

「なぜ、貴様がその名を知っている」

side 子供

首に添えられた刃物は、私に、答える以外の反応をさせなかった。

「は、母の写真立て。あなた写っていた。名前もそこで知った。」

かたことになってしまったが、私はすぐに話した。

わずかな沈黙。数秒にも満たなかったその時間は、永遠のように感

じられた。

「おまえの母の名は？」

「エ、エノア。エノア・ベルスト」

青年は少しの間何かを考え、上から降り

「すまなかった」

謝ってくれた。

さっきまでの威圧はなくなつたが、警戒はされていた。

青年は手に持っていた刃物・・・スプーン？をスープの器の上に置き私に渡してくれた。

「スープだ。飲みたまえ。味は保障する。」

「ど、どうも」

差し出されたスープは食欲をそそられるようなよい香りがしていた。差し出されたスープを飲む。変なものが入ってないか確かめるように少量だけ。

だがそんな心配は杞憂に終わった。

「おいしい」

母のスープ並みにおいしかった。相手の人を見ると笑っていた。見ているこちらまで幸せになる。そんな笑顔。私はすぐに顔をそらし、スープを飲み始めた。お腹が空いていたので時間はかからなかった。

「ごちそうさまでした」

「どういたしまして」

青年は器を取り立ち上がる。

その動作は綺麗で、一縷の無駄も無い様に見えた。

「ク、クリフさん」

器を洗いに行くであろう青年を呼びとめる。

「昨日は助けてくれてありがとうございます」

一番初めに言わなくてはいけなかったであろう言葉を話す。

青年は立ち止まり一言

「ノア・エミリ。今はそう名乗っている」

そういつて扉を開けて行った。

クリフと呼ぶな。そう背中が語っていた。

.....

器を洗い終えて彼が帰ってきた。彼は器を棚に戻し私の前に座った。

「さて少年。何か質問はあるかね」

ここは、何処？あなたは誰？など聞きたいことはたくさんある。しかし、何よりも言わなくてはいけないことがある。それは、

「わたしは、女です！」

そう、私は正真正銘女である。確かに胸は大きくなく、髪も肩ぐらいまでしかない。

声だって声変わりしてない男の子と言われればそう思ってしまつかもしれない。

だが、今は昼で顔もはっきりと見える。この人は私をここまで運んでくれた。

ならばなぜ気づかない。私が女だということに。

「だが、抱えた時かんしょ、それ以上言わないでください！」

「わ、わかったから落ち着け」

私は近くにあったトンカチを投げる。続いてキリを投げようとするも手首を捕まれる。しぶしぶ私はキリを床に置いた。

彼は汗をかいていた。もう二度と私の前でその話はしないでらう。

「それで他に質問はないか」

「ここは何処ですか」

「ここは私の家だ。昨日の道から少し森に入ったところにある」

「あなたは誰ですか」

「ノア・エミリだ」

ここは空気をよんで次の質問へ行く。

「何をしているのですか」

「動物を狩ったり、木の実を採集している」

この世界には”魔物”と呼ばれる生き物がいる。

この世界での動物と魔物の違いは、瘴気を帯びているかいないかである。帯びているものは食べられないし、生命力が多少高くなるので殺しにくい。

判断は、体から黒い煙みたいのが出ているので簡単。

「その指輪は？」

彼は手に指輪を付けていた。右手の人差し指。

リングは銀色で宝石は蒼緑色。暮らしとあっていない綺麗な指輪だった。

「ただの飾りだ。さあ、もういいだろう」

触れられたくないのか話を中断する。

彼は立ち上がり引き出しの中を探っている。

いまさら気づいたが彼の服は無地だが、とても似合っている気がする。作業着なんだろうか？

彼が箱を取り出し私に前に正座した。

「服を脱ぎなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした？他に怪我が無いか見るのだから早く」

「一人でできますー！」

私は箱を奪い取り、薬を頭と足に塗り始める。
薬を塗った箇所は熱くなったが、すぐに痛みとともに引いていった。
高い薬なのだろう。

「どうだ？」

「あ、大丈夫です」

足をプラプラさせて大丈夫だと見せる。

彼は一言、よかった、と呟き安心した表情を魅せる。
だから、その顔は反則！

「さあ、もう帰りました。親御さんが心配しているだろう」

「そうですね、わかりました。イタッ！」

立ち上がるうとした私に痛みが走る。足を押さえ、床に座り込んだ。
外傷は治ってもひねりは治ってなかった。
彼もそれに気づいたようで

「村まで送ってあげよう」

そう言ってくれた。

- - - - -

ドアを開けると森だった。森の中にあるので当たり前だが、家の前
はドアが開くほどのスペースしかなく、道など無かった。あるのは
木。右も左もわからない私に彼は

「こつちだ」

そう言った。

道なき道を進む、景色は同じで、遭難だと思ってしまっただけ程変わらな
い。だけど、彼の歩む姿は迷いが無く、凜としていた。
けっして後ろは振り向かないが、邪魔な枝をナイフで切ってくれる
所に、不器用な優しさを感じた。

「やっとついたー」

五分くらい歩いた後、ようやく道が見えた。

柔らかな風がほほをなでる。小川の音はとうに聞こえなくなってい
て、小鳥の声が聞こえている。

彼は汗一つかかずに、道を歩き始めた。その隣を私は歩く。
さっき質問できなかったことを聞いてみることにした。

「クリフさ」

「ノアだ」

拒絶。表情は変えないが、声が拒んでいた。

「そういえば、ノアさんは、なんでスプーンを首に当てたんですか
？」

「近くに刃物が無かったのですね。首に冷やりとしたものを突きつけ
られると怖くなるものさ。たとえそれがスプーンでもね」

そう答えた。表情は冷静だが、声はどこか自慢げだった。

せめてその十分の一でも女心に気がまわって欲しい。

「そつだ、まだ名前を聞いていなかったな」

ふと、彼は私に言ってきた。私も、そつだった、と思い

「ミス・ベルストです」

改めて挨拶をした。

「ではミス、聞きたいことがあるのだがいいかな？」

「なんですか？」

「その、腰に付けているものは何だ？」

私は自分の腰を見るが、特に変わったものは無い。

「その青い箱のものだ」

「これですか？」

私は腰にある青い物を指す。青年は、こくりと頷いた。

「財布ですよ」

この世界のお金は、鉄貨、銅貨、銀貨、白金貨、金貨、
となっている。十枚ごとに左の硬貨一枚へと変わる。

お金の形は円形で、一枚一枚が薄いため、重さもあまり無い。昔は
紙のお金もあったのだが、すぐに燃えたりするため無くなってしま
った。

私の財布は、硬貨が10枚入る所が二箇所あり、五枚入る所が二箇所

所、計三十枚入る。他にも色々な種類があるが、大抵の人はこれで十分である。

「そんなものがあるのか」

彼は感心していたが、私はびつくりした。

というのも、これは出来たのは三年ほど前だが、使い勝手がよく爆発的に売れた。発売当初は売り切れ続出の超人気商品。今では持っていないほうが珍しい。

それが、知らない、というのはどこがおかしかった。

「む、何か顔に付いているのかな」

「あ、いえ、なんでもありません」

彼はしかめっ面になり、機嫌を悪くした。そんな所が子供っぽく可愛らしかった。思わず笑みがこぼれた。

すると彼が足を止めた。怒っちゃったのかな？。私も立ち止まり彼のほうを振り返る。

「そんなに、怒らないでく・だ・さ・さ・」

それ以上私は言葉をつなげることができなかった。

憤怒の表情。その姿は、怒りに燃える勇者のようでありながら、戦いに喜びを感じる狂戦士のもようでもあった。

彼は走り出した。一陣の風が吹く。風は私の目を閉じさせた。強く猛々しいその風は、一回だけ轟きを呻き、すぐにやんだ。目を開け

ると私一人。彼の姿は無く、その足音でさえも、聞き取れなかった。

side ノア

なるほど、あれは財布だったのか。
箱の謎が解けた私を、ミリスはおかしそうに見てた。

「む、何か顔に付いているのかね」

「あ、いえ、なんでもありません」

やはり、知らない、というのはおかしいのか。村人との交流をもう少し持とう。

その思っていた時、風に乗って臭いが流れてきた。

血の臭い。

人が焼ける臭い。

私の脳裏にあの時の惨劇が甦る。十年前のあの日、自分の行動から、村を巻き込んだ。皆が死んでいく中、自分はこのうたと生き延びたあの日。

気づいたら走り出していた。自分がどんな表情をしていたかわからない。自分が何を思っていたのかもわからない。ただその瞳は、まだ見ぬ場所を見つめていた。

私は言葉を口に出す。

「収束」

右手の指輪が光る。

私の手に剣が握られる。漆黒の剣。昨晚、山賊たちを蹴散らした剣は、太陽の光受けるも、ただその黒さを強調していた。

聞こえてくる悲鳴。それは村が近いことを意味し、襲われていることを意味していた。

空が紅くなっていた。

↑2 不思議な人（後書き）

時間があいたのを、く閑話休題く、とやったほうがよかったのかな？

読みにくかったら、悪い点、にでも書いて下さい

③ いじまやんら (前書)

ルビの振りが難しいです

『3 いじもどつり』

「山賊だあー」

それが悲劇の始まりだった。

いつもどつり起きて、いつもどつり遊んで、いつもどつり食べて、いつもどつり寝る。

そんな僕の、いつもどつり、は無くなった。

「おきなさーい。ごはんですよー」

お母さんの声が目覚まし時計の替わりとなり、僕はおきた。

窓を開けると、雲ひとつ無い空。とてもいい天気だ。

今日も、いつもどつり、が始まった。

「今日は野菜のためですよ」

「僕、野菜きらい」

お母さんは、無視をして食べてる。しかたない、食べよう。下手に文句を言っつて、昼食さえも野菜尽くしにされたら困る。

そんな、いつもどつり、に亀裂が入った。

「山賊だあー」

お母さんは、急に椅子から立ち上がり、窓の外を見た。僕も窓の外を見に行った。

窓の外にはたくさん知らない人たち。手には色々な物を持っていた。村の人たちと物を持って喧嘩をしていた。悲鳴が聞こえた。血が飛び散って人が倒れた。ようやく何が起きているのか理解できた。

僕は、怖くなってお母さんのほうを向こうとした。

「うわあ！」

向き終わる前にお母さんが僕を持ち上げた。お母さんは、お母さんの部屋に向かって歩き始めた。とても、とても早く歩いた。

部屋に着いたとたんに、僕は洋服入れの中に押し込まれた。勢いよく入れられたおかげで多少痛かった。

そんな僕を見向きもしないで、お母さんは洋服入れの扉を閉じた。

「お母さん！お母さん！！」

「いい？何があっても外に出ちゃダメよ。声を出すのもダメ。いいわね？」

扉は開けようとしても開かなかった。

遠ざかる足音。僕は怖くなって手に着けていた腕輪を握る。

この腕輪は、以前、お父さんとお母さんと一緒に町に出かけた時に買った。「とくちゅうひん」というものらしく、世界で僕たちだけしか持っていない宝物だ。

「男は殺せ。女、子供は捕まえる。抵抗するなら殺してもかまわんとこの指示だ」

悲鳴が聞こえる。僕は声を出すのを必死に我慢する。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

血の臭い。隙間から漏れる一筋の光が僕の心を支えていた。下で物音が聞こえた。が、すぐに静かになった。

足音が聞こえてきた。お母さんが帰ってきたんだ。僕はここだよ。

トントントントン

お母さんに聞こえるように叩く。何度も、何度でも、聞こえるまで。足音が近づく。扉が開かれた。

「ガキひとりはっけーん」

扉が開いて見えたのは男の人。お母さんじゃなかった。

男の人は僕を片手で持ち上げた。握られた手首はとても痛かった。

「はなせ！はなせよ！」

僕は抵抗した。握られた手首が痛かったからじゃない。手に着いていた生暖かい、何か、が気持ち悪かったから。

僕の足がたまたま相手の足に当たった。

「いってえな、クソガキ！」

男は僕を投げた。窓が割れ、外に放り出される。ここは二階、普通なら死んでしまうけど、僕は死ななかった。

地面にあった、何か、がクッションの役目をしてくれたから。

それは死体。首から上がないので誰かはわからない。しかし、右腕には僕と同じ腕輪がついていた。

辺りは炎。家、動物、人。全てが燃えていた。全てが奪われていた。

「まだガキがいたのか」

放心状態の僕に山賊が近づいてきた。

もう死のう。

でも自殺は怖い。

抵抗すれば殺してくれるかな？

僕は近くにあった物を山賊にむける。それを見て、男はにやりと笑い、刀を振り上げる。僕の心はどこか満ち足りていた。

風を切る音。それは前からではなく、後ろから聞こえた。振り上げられた刃は、振り下ろされることはなかった。

神様は残酷だ。僕に死ぬことさえ許してくれない。

side ノア

悲惨な状況だった。入り口には死体があり、いくつかの家が燃えている。

死体のそばで泣き叫ぶ子供。必死に逃げる人、それを追い回す山賊。

それは十年前のあの日を客観的に見ているようだった。

こみ上げる吐き気を抑え、私は走った。少しでも犠牲者を減らすために。一人でも多く救うために。

目に入ってきたのは、今にも殺されそうな子供。相手は今にも刀を

振り降ろそうとしていた。

私は懸命に走った。あの子を救うために。

グシャ

刀は振り下ろされた。伸ばした手は何も掴むことは無く、ただ零れ落ちていった。

「う、うおおおおお」

私は呻いた。また救えなかった。山賊は私に気づく。しかし、

「遅い！」

私は斬った。疾風の攻撃は、一閃で男を両断した。山賊は地面に崩れ落ちたまま動かなくなる。

少年だった物を見る。切れ味が悪かったのか、斬撃ではなく、殴打で死んでいた。

炎が燃え盛る中、力無き悲鳴は私の耳に低く、つぶやく声で響いてきた。

まるで呪い。

だが、私は一言一句聞き漏らすことは無かった。

少年だった物に背を向け、再び私は駆け出した。

s i d e ミリス

「なによこれ・・・」

村に着いた私を出迎えたのは、目に隈が出来ているお父さんでもなく、日の昇る頃から畑仕事をしている小母さんでもなく、終わらない叫び声だった。

何が起こっているのかなんてすぐにわかった。

「そつだ！お父さんは!？」

私は夢中で駆け出した。足が痛いのがなんか関係ない。ここで走らなきゃ、一生後悔するかもしれないから。

心臓の音がうるさい。息がうまく出来ない。

踏み出した足は、泥沼に沈むかのように重く、私の進行を阻んだ。

頭が、行くな！、と叫んでいる。最悪の状況が脳裏に、ザザザと音を出して描かれていく。

止まりそうになる足を歯を食いしばって堪える。

「お父さん！」

やっと家にたどり着いた。靴も脱がずに家へと駆け込んだ。

散乱した家具、壁にある無数の傷跡、赤色のしみ。そんな物には目もくれず、ただお父さんを探し続けた。

居間に、お父さんはいた。床の上に寝転がっていた。どうやら眠っているらしい。

赤色の絨毯の上に寝ていて

あれこんなのあつたっけ

右腕はありえない方向にまがっていて

寝相がわるいのもほどがあるなあ

その胸には剣の形をした装飾があった。

おとうさん、はやくおきてよ。

声を出しているつもりが、でてくるのは泣き声だけ。

早く起きないとあぶないよ

起こすために肩に添えた手は、父親をゆする以上に震えていて

起きないと怒るよ

その瞳は、すでに父親を見ることはなく、ただ落ちていく雲を見つめていた。

「ち、まだいやがったのか」

声は山賊の物だった。山賊はゆっくりと私に向かってきた。

こいつらが父を殺したのか。

「さ、おとなしくこい」

山賊は私の頭に手を伸ばす。

私に触れるな

私は相手の腹を思いつきり殴った。力いっぱい打ち抜くように殴った。

山賊はガシャンと音をたてて崩れ落ちた。元々荒れていた家が、さらに荒れた。

だが、すぐに立ち上がって刀を抜いてきた。

血が垂れ続ける剣を見て私は思った。私は何をやっているんだろう。

私はすくみ上がってしまった。さっきまでの勇氣は無く、唯一鍵のある母の部屋へと駆け出した。

ガチャンと鍵をかけた後、ドンととびらを叩く音が聞こえた。

ドンと部屋に響くその音は、一回ごとに息を止める。

私は母の部屋にあるあるものを探す。

それはロザリオ。

私は怖くなってロザリオを握る。

母の持ち物であるこれは、私の不安を和らげた。

だが、それも束の間、ドアはバンという音とともにひらかれた。

「さつきはよくもやってくれたなあ」

血眼になって男は私を見る。

殺気。もし、これが初めて感じたなら、私は気絶してしまったかもしれない。

でも、以前受けたノアさんの感じが、私を踏みとどまらせた。

しかし、恐怖は拭いきれない。殺される！。私はぎゅっと目をつぶった。

その瞬間、光が辺りをつつんだ。

走馬灯とは光る物なのか、と場違いなことを思ってしまった。

光は目をつぶっていてても目の前を白くした。

光はすぐにおさまった。辺りは何も変わってなく、山賊のほつはちらを恐る恐る見ていた。

私は何が起きたかわからなかったが、ひとつだけわかったことがあった。

それは相手との距離が開いているということ。

この距離なら窓から・・・

私は呼吸を整え、一気に窓から外へ出た。

地面に何かがあるかなんて確認しない。ただ逃げるだけで精一杯だった。

勢いの付けすぎで着地も受身もできなかった。

痛い

でも痛みが自分に、生きている、ということを実感させた。

立ち上がるため手を地面に付き、前を向く

「うそでしょ・・・」

やめてよ。そんなのみたくないよ。殺されるのなんて見たくないよ。

目に映ってきたのは、今にも殺されそうな子供。

「やめてー！！！！」

山賊は、私を一度ちらりとみて、

また視線を戻す。振り上げた刃からは、ぼた、ぼた、と血が流れて

いた。

ヒュン

刀は疾風のごとき一閃で、振り下ろされた。

しかし、その刃は子供に届くことは無く、何か、によって阻まれた。

振り下ろす刀が疾風ならば、阻んだ何かは烈風。

疾き風は、烈しい風によってその体ごと飲み込まれた。

「大丈夫か？」

地獄の中で天使を見つけた。差し出された左手は、あの時と変わらず、安心できた。

「ノアさん・・・」

あたたかい。人の手ってこんなにあたたかいんだ・・・。

「そこまでだ」

山賊の声。

私たちを中心に扇形に相手は並んでいる。後ろには私の家があり、逃げ場は無い。

「こいつが例のやつか。なるほど、確かにいい武器と指輪を持っている」

一際目立っている男が喋る。ボスなんだろうか？。一人だけ雑だけど鎧をつけている。

「この大人数に勝つつもりでいるのか？」

「誰一人逃がすつもりはない」

相手は、ほう、と呟き

「なら死ね」

呪文を唱え始めた。火の魔法。

火が男の手のひらに集まっていた。

死のカウントダウン。5から始まるそれは、チクチクと音を刻みながら進んでいった。

逃げれない。足が動かない。とうとう限界だ。私はここで死んじやうのかな・・・

ノアさんが剣を構えた。何で逃げないのだろう。ああそうか、私たちあしでまがいるからか。

ごめんなさい。私と関わったばかりに。そう思いながら彼を見た。

「なに・・・あれ・・・」

私は始めて脅えた。

死にはない。死なら昨晚覚悟していた。

彼の右手。それは大きな剣だった。だがそんなことは問題ではない。

剣から瘴気が噴出していた。

漆黒の剣は右腕を絡めとり、握り手を固定する。それは、手を護るようでありながら、死んでも離さないように見えた。

「発射！」

火の玉が飛んでくる。大きい。彼の剣も大きい。火の玉はそれ以上に大きかった。

防げるはずが無い。けれども彼の姿は勇気に満ちていた。

彼は、おおきく一步を踏み出し、火の玉を切り

パン！

消滅させた。

「「「なに！！！」」」

そのまま、彼はボスに近づく。所詮は烏合の衆。ボスの周りのやつらは、彼の偉業を見て逃げて行った。

ボスも剣を構える、が遅い。剣を構えたときにはすでに漆黒の剣が振られていた。

ズシャ

倒れた。崩れた。私たちの村を襲った病気は、黒き薬によって治された。

彼は剣についた血を、ピツと払い辺りを見渡した。

足元には死体。周りは火の海。一人たたずむは、孤高の剣士。まるで絵画。暗き光景のなか、その空間だけは色鮮やかに見えた。

剣士がこちらに歩いてくる。

「ぼろず」

淡々と告げるそれは、彼の口調。

「力無き正義は、ただの理想に過ぎない。そのことをよく覚えておけ」

彼は歩き続ける。

さすがに酷いと思った。一言だけでも文句を言いたかった。私は痛む足を無視してたちあがり、彼に向かって

「！」

何も言うことができなかった。

「なんで、

彼がどんな顔で話したかを知らない。」

なんで、そんな顔をしているのよ」

だが、私が見たのは、自信が溢れてなく、悲しみが満ちていた。

遠ざかる彼の背中。それを追いかけることはできなかった。

「なんなんだよあいつは」

思わず口からこぼれ出る。お頭の魔法は効かないし、剣技も一流。

「勝てるはずが無いじゃないか」

森にある一段と草が高く生えている箇所を抜ける。いつもなら足だけで行く道を、手も使って抜ける。

「ついた」

洞窟。山賊たちの隠れ家。ここにこれれば安心だ。よかったぜ。

「うわぁ！」

足をとられた。なんだぁ！？くそ、いらつくな。

踏んだものを確認する。それは腕。

「……え？」

その時、ガサガサと草むらが揺れた。

「た、たぜえ」

何を言いたかった分からない。見知った顔が目の前で草の中へと消えていった。

「あとはお前だけか」

死刑宣告にも似た声が聞こえてくる。

「だれだ、だれなんだよお」

「言ったはずだ。誰一人逃がすつもりはない、と」

その声が頭に聞こえて、

ヒュン

死刑が執行された。

↑
3 いじもやじりり（後書き）

ルビが振れてるかどうか心配です。

誤字脱字を歓迎、むしろ募集しています。

¶ 4 別れと旅立ち（前書き）

設定が設定なんで、極力、横文字は使いません。

4 別れと旅立ち

夜が明けた。日差しがまぶしい。周りは焼け野原。何度夢だったらしいのと思ったのだろう。

父の亡骸を埋め、疲れから眠ってしまったあの日。結局ノアさんは姿を見せなかった。

家に戻ってしまったのかな？。なんでだろう胸が痛い。

よいしょと。寝袋をかたづけて、何をしようかな？。

いつもなら食事の支度をするのだが、する場所もするものもない。

クルルルルウ

おなか減ったなあ・・・

「フギヤ!?!」

いたーい。なによいったい。・・・木の実？
うつむいていた私の頭に木の実が当たる。

「食べる」

顔を見なくても分かる。この声は

「ノアさん」

彼は私の隣に座った。あぐらをかいて、手をひざに乗せている。しばしの沈黙。

「すまなかつた」

突然謝られた。何を謝る事があるの？

「私をもっと早く着いていれば」

あなたがいなければ誰も助からなかつたのに。その表情は私に対する慰めではなく、本気で悔しがつていた。彼は、ハツとして

「すまない、こんな話をしてしまつて」

「あ、いえ、大丈夫です」

・・・沈黙が痛い。何か話さなきゃ

「なんで木の実をぶつけたんですか、痛かつたんですよ」

「下を向いている者に明日は来ない」

「は、はあ」

青年は顔をそむけた。正直納得がいかない。

「ほんと手前に落とすつもりだったのだが」

「何か言いました？」

「いや、なにも」

たわいもない会話。そんな会話が私の心を軽くした。自然と笑みがこぼれてきた。

遠くから村の人が近づいてくる。

「あなたが、村を救ってくれたひとか」

声をかけたのは、村の村長さん。村長といってもまだ40後半だ。

「まずは、礼を言おう。救ってくれてありがとう。」

村長さんたちは頭を下げる。青年は微動だにせず見つめている。村長さんは顔を上げて、青年を見つめる。歯に何かつめっているかのように、口をもごもごと動かす。一度目を閉じ、目をゆっくりと開けて彼に言った。

「感謝はしている、が、村から出てってくれないか」

「ちよ、ちよっとまって下さい」

私は村長さんに話しかける。

「何でなんですか」

なんでこの人が追い出されなくちゃいけないの。

「ミリスか、少しどいていなさい」

村長さんは私を見て、また視線を彼に戻した。私の質問に対する答えは無視。だから私は声を荒げ、村長さんに問いかける。

「何でなんですか!」

「山賊が来た原因……だろ」

私の質問に答えたのは、村長さんではなくノアさん。
理由を聞いて私は思い出した。

「こいつが例のやつか。なるほど、確かにいい武器と指輪を持っている」

そうか、山賊は村ではなく、この人を狙ってきたのか。

村長さんはうなずいたあと、

「あなたを追放するという形になるのは不本意だが、村人の怒りを治めるためだ。恨むなら恨んでくれ、許してくれとは言わない。」

静かに、きつぱりと言った。決して退くことはないという意味の表れ。

「まって!」

でも、やっぱり止めたい。だって

「その人がここに来たのは私が原因なの!」

この人は、あの夜私を助けてくれた。私を助けたから、山賊に存在を知られた。

私を助けなければ、何も起きなかった。

「その言葉の意味が分かっているのか」

怒ったような声が聞こえてきた。だけど負けない。だってこの人は悪くない。悪いのは全部この私。返事は目で返した。

「・・・するしか」

「いや、・・・でも・・・しかし」

村長さんたちは、話している。重苦しい雰囲気。

どのくらい時間が流れていたのだろうか。私とノアさんの方に向いて

「では、ミリス・ベルスト。処分を言い渡す」

村長さんは、ごほんと咳払いをし

「村からの追放を命じる！」

覚悟はしていた。村の怒りを治めるには、怒りの原因を断つしかない。それが例え、村の人であっても。

「わかりました・・・」

が、覚悟と現実は違った。悲しい。生まれ育った村から離れるのはやはり悲しい。

父母との思い出がたくさん詰まった村。この村ともお別れ……。

「出発は今日の午後とする。別れを話したい人がいれば話すといい」
そういつて村長さんたちは、帰っていった。

「これでよかったのか？」

「ええ、よかったですこれで」

悲しいが悔いはない。言わなかったほうが後悔するにきまっている。

「とりあえず、お別れを言ってきますね」

私は立ち上がって歩き始めた。

「そっちに村はないだろう」

彼のつぶやきは、風の音にさえぎられ、私の耳に届くことはなかった。

side ノア

顔など見なくても泣いていると分かった。声は言葉になっておらず、震えていたのだから。

さて、何をしようか。準備といっても何もすることもない。
これだけ派手に騒げば奴らも気づくだろう。

……潮時、か。

これを機に私も移動しようか。

「ノアさん」

「もう挨拶はすんだのか」

ミスが帰ってきた。彼女の目は多少赤くなっているが、何も言わないでおく。

「ええ、もうすみました」

そういう彼女の背中には、なにやら見慣れないバック。そんな私の視線に気づいた彼女は、

「旅支度です」

なるほど。納得。

「それより、遅れちゃったけどあの場所へ行きましょう」
「時間はあるのか？」

すぐ近くなので大丈夫です！、と無い胸を張る。

・・・と同時に矢が飛んでくる。

それを間一髪でかわす私。

ミリスの手には弓と矢が握られている。ちょっとまで、なぜ次矢がつかえられている。

冷笑が怖い。何を言いたいかなど雰囲気で分かった。

もうその話はしないって約束しましたよね。

思っただけでもだめなのか！？

矢の先端は私に向けられたまま、さらに弓が引かれる。これはお願いじゃない、命令だ。

「わたしがわるかった」

「じゃあ、行きましようか」

冷笑は消えた。彼女は歩く。

二度と思うな。

そう背中が脅していた。

ミスに案内され、あるところに来ていた。

墓の前。墓の名は「エノア・ベルスト」

エノアという同じ名前かもしれない。そんな甘い幻想^{ユメ}は墓に飾って

あつた写真で壊れる。

「母は、私が七歳の頃亡くなりました」

これは、ここに来る途中の回想

「十八で父と結婚して、二十で私を産みました」

どこでもそのようなものだ

「母は、料理がともうまく、優しかったです」

「でも、なぜか母は昔話をしてくれなかったんですね」

不安は現実となった。

結婚した後の写真だろう。エノアは手を前に組み椅子に座っていた。手には指輪がはめられている。

髪をのばしたのだろうか、腰まである綺麗な黒髪だ。

来る途中摘んできた花を供える。

感情の無い灰色の墓に、悲しみの青の花が添えられた。

もう来ることはできない。私は、天国のエノアに語りかける。

s i d e ミリス

サラサラと流れる水を汲んで母の墓に行く。小川は、お墓からは近いが、

「お、おもい」

距離と感情はべつものだ。水がたくさん入った桶を両手で持ち、彼のいる墓へと歩いていく。

ノアさんがたたずんでいた。

「
」

何を言っているのだろうか？よく聞き取れない。

墓まで歩いていく。水をこぼしそうになるのを耐えながらゆっくりと歩いた。

「何を言っていたのですか？」

「口に出していたか？」

「はい」

どつちやら無意識だったらしい。

「気にするな、忘れてくれ」

あ、紅くなってる。かわいい。なんか得した気分。

「でもお母さんに兄が居たなんてはじめて知りました。」

「そうか・・・」

そう答える声はどこか上の空だった。

お母さん、もう来られないんだ。ごめんね。

お母さんの墓を掃除しながら思う。最後だから特に念入りに掃除をする。いつもなら掃除をしないところまで、気合を込めて掃除した。

「もういいのか」

「はい」

ほんのりと汗をかいた。タオルで汗を拭いていると

カーン、カーン

集合の合図である鐘の音。あの話の後に聞いたのだが、他に引越す人も何人かいるらしい。

道中は危ないからまとめて移動するという話だ。

村へ歩く。

一回だけ振り返り、また前を向いた。

なんであなたがこっち側にいるの？

私たちの村は、リア村という。私たちの村からは、ファールレ村とチルル町にいける。

私が行くのはチルル町であり、ファールレ村ではない。と、いうのも

「ファールレ村の方に行くのはやめた方がいい」

ノアさんの助言。彼曰く、村から村へ情報が伝わるのは早い、ということらしい。

彼の声は自慢げな声。少しいらつとしたのは言うまでもない。実際、何人か私のことを睨んでいた。とりあえず、彼の助言に従うことに決めたのだが、

「ファーレ村に行く方はあつちですよ」

ノアさんまでがこちら側に居た。ノアさんの家があるのはファーレ村の方だ。

チルル町に行くにしても、支度をする必要があるため一回家に帰らなければいけないと思う。

「この身一つで旅に出ようかと思ってな」

なるほど、こちら側に居る理由と家に帰らない理由がわかった。なんか考えてることが筒抜けみたい。なぜだろう、なんかむかつく。

でも、行く方向が同じなら

「じゃあ、私も付いて行っていいですか」

ノアさんは驚いた表情をした。だから私は分かってしまった。

ああ、この人は私に付いて来てくれるつもりだったんだ。驚いた表情は、あまりにも不自然で、ぎこちなかった。彼の不器用な優しさ。

「危険だぞ、いいのか」

「はい、大丈夫です」

だってあなたが護ってくれるんですから。

私の笑顔が以外だったのか、彼はムツとし

「本当にいいのか？」

「どうせ行く当てもありませんし」

顔を伏せ、悲しむふりをする。やっぱりノアさんは若干戸惑っている。

「離れたければいつでも離れていいからな」

ノアさんは、耐え切れなかったのか前をむいた。
主導権ゲット！

隣にいた小さい子供が脅えていたが気にしない。

私は小走りで彼の横まで行き、並んで歩いた。

緑が生い茂る森の中を、さわやかな風が流れる。

花は咲き誇り、それはまるで新しい世界への扉。

澄む渡る青空は、光を阻むことはなく、心地よい日差しを恵む。

まぶしいと思うも、次の瞬間には新しい生活のことで頭が一杯になった。

小鳥の囀りが、始まりの鐘だった。

↑ 4 別れと旅立ち（後書き）

作者がこれを書く前に、書いてみようと思った小説

ファンフィクション

原作：リリカルでマジカルなお話 s t s 編

設定：魔王が無印の頃の姿に戻ってしまう。展開によっては、f a t e や闇の書の主 も子供の頃の姿になる。

七つの玉を集める物語G Tの設定ですね

特徴：皆さん萌え死ぬ。戦闘に色々な支障が出る（主にf a t eさん）

リアル友達親子。さすがに学校へは行かない・・・と思う。

書かなかった理由：作者が知っているのはA・sまで

15 チルル町到着（前書き）

基本、作者は漫画みたいに良いところで切ります。

まあ、それがおもしろいかどうかは別の話なんです

が、
それでは、本文へどうぞ

『5 チルル町到着

今、私たちはチルル町へ向かって歩いている。ノアさんと私は他の人よりも少し早く歩いている。というのも他の人たちからの視線が痛いからだ。

初めての旅に、不安よりも期待が勝っている。

「ミス」

そう話しかけてくる彼は、全く心配事が無い様に見える。

「なんですか」

「弓はどのようになっているのだ」

「ああ、あの弓ですか」

弓は・・・と、あった。

「こんな風になっているんですよ」

私は弓の両端を伸ばし、固定する。彼は、ほうっ、と感心した。

この弓は母の形見の一つだ。両端を伸ばすことで弓としての機能を持つ。主に、森の中で使うように普段は折りたためる仕組みになっている。

「きちんと使えるのか？」

「大丈夫ですよ」

細工がしてあることで強度は弱くなったが、充分使える。

「参考までに聞いておきたいのだが、ミリスの弓での絶対距離はどのくらいだ」

「絶対距離？」

「確実に当てられる距離のことだ」

そういわれてもなあ

「だいたいいい」

「なら、30メートルくらいです。この弓なら20メートルくらいだと思います。」

リア村では動物を狩ったり、弱い魔物を退治することもあったので、普通の人よりも腕には自信がある。

「なら、あれを射抜けるか」

そうやって手を向けた先にあったのは、木の実。道の真ん中まで伸びた枝に、ちよこんと実っていた。

「あれくれいなら」

私は弓を構える。矢をつがえ、弦を引く。

弓は母に教えてもらった。基礎基本を重点的にやった。

「静止状態以外の射では、命中率が悪く、射ても中たらない。そんな場合はすぐに逃げろ」というのが母の言葉だ。

うまい人は移動しながらでも当てられるが、そんなうまくなるつもりはなかった。

ヒュン・・ピッ

矢は風を切り裂き、木の実を傷つけることなく、地面に落とす。

「見事だな」

褒められるのはうれしい。

ノアさんは地面落ちた木の実を拾い、森に投げた。

投げた木の実は、すぐ近くの木に辺り、その果汁を彼に浴びせた。

普通なら木にかかるはずが、運が悪かったのか、落ちた衝撃で割れた部分が彼の方を向いたまま割れた。

「町に言ったら服を買いましょう」

乾いた笑い声しかでなかった。

side ノア

チルル町。

クリエト帝国に属している。北と南には山が広がり、東に行けば海に行くことができる。西に行くとダルト帝国と国境を接しているらしい。

西から大陸の中央へ行くには、この町を通る必要があるため、交流があり、大きい町だ。

ちなみに、リア村もクリエト帝国に属している。

「ついたー」

疲れを吹き飛ばすような元気な声はミリスの声。町は紅く染まり始めていた。

「まず服屋を探しましょう」

「そうだな」

「いらつしゃいませ」

女性が爽やかな挨拶で迎えてくれた。広々とした店内には、様々な服が置かれている。村にある裁縫屋などと違い、容姿に重点をおいて、あまり実用性がない服などが大半を占めている。

「恋人同士ですか？」

「そのようなものだ」

他人に自分たちの話をするのは極力避けたかった。窓から差し込む紅い光がミリスの頬を染めている。

「私には丈夫な上着を、彼女には」

「わ、私は動きやすい服を」

「では彼氏さんはこちらに」

私は店員さんについて行った。歩く姿も教えられているのか、さまになっている。

「では、こちらなどはどうでしょう」

勧められた服は深い藍色。値段もそこまで高くない。

「通気性に優れ、鎧の下に着るのに適しています」
「連れと相談して決めたい」

自分ひとりの旅ではないのだから、勝手に決めるのはまずい。服を預かり、ミリスのほうへ向かった。

「ノアさん」

ミリスはすぐに見つけた。

今の格好なら、百人中百人が女だとわかる。

なぜなら、スカートをはいているから。

「似合っていますか？」

「よく似合っている」

彼女は、にこつ、と笑いその場で回転した。両袖が風をはらんでふわりとゆれる。

どうやらその服がかなり気に入ったらしい。

「お値段は全部で銅貨1枚と鉄貨5枚になります」

袋から金を取り出し、相手に渡した。もう日も落ち、辺りも暗くなり始めてきた。

「この町の宿屋はどこにありますか？」

「一般用ですか？それとも冒険者用ですか？」

「どうやら、それぞれで別にあるらしい。」

「どのような違いがあるのですか？」

「雨風が凌げればいいのが冒険者用です」

うむ、じつに単純な答えだ。ふむ、一目だしミリスも疲れているだろう。ならば、

「なら、いったい『冒険者用を教えてください』」

いいのか、と目で確認する。ミリスは頷いた。

「ここをでて左に行き、左に曲がると冒険者用の宿がある場所へと行けます。一般用へは左に行って右に曲がって下さい」

side ミリス

ちりんちりん、と音を鳴らして外にでた。

先ほどまでとは違い、辺りは暗く、人も少なくなっていた。

「さ、行くところか」

道を教えられた通り歩く。左に行き、また左。私たちの前に一際大きな建物が映った。

「ギルド？」

「知らないんですか？」

という私も実物を見るのはこれが始めて。青色の建物は、看板に“ギルド”と書いてあった。

ギルドは八年前くらいにできた。依頼者の仕事をこなすことで報酬がもらえる仕組みだ。今ではほぼ全ての”町”にある。一説によると、あの財布もギルドが作った、と言われている。

「なるほど」

というか、この人世間を知らなさ過ぎではないか！？こんなんで旅を続けられるのだろうか。

あれ、なんだか頭痛くなってきた。

「怪我が痛むのか？」

ごめんなさい、あなたのせいです・・・

「ほら、あそこに宿屋があるぞ」

彼が指差すほうには宿宿宿。ところせましと宿屋が並んでいた。その中の一番綺麗そうな宿に入った。

「すみません。満員です」

あっさり断られた。その次の宿に入った。

「ごめんなさい。空き部屋がありません」

ま、まあ次があるよね

「まことに申し訳ありません」

「申し訳ございません」

「悪いね」

なんなのよー、と叫びたいのだが時刻は夜。周りの迷惑も考えて心の中だけで怒った。

ノアさんは疲れもせず次の宿へと向かって行った。付いてく私の足どりは重い。

「空いていますよ」

宿にして六件目。ついに私たちは、空いている宿を見つけた。カウンターにいるおじさんは答える。よっこらしよと重い腰をあげる。

「朝食、夕食付き。トイレ風呂共同。ベットがある部屋は既に埋まっているから、敷布団になりますけどいいですか？」

「それをお願いします」

「二人で銅貨4枚になります」

銅貨4枚を渡す。

「いつも、こんなに混んでいるのかい？」

「いや、いま丁度徴兵がかかっていてね。この町に兵士たちが集まっているのさ。自信があるなら行ってみたらどうだい？参加だけで白金貨二枚だとさ」

そう言うとおじさんは鍵と紙を取り出した。

「それが、徴兵の詳しい紙です。部屋は一階の一番左になります」

私は鍵を、ノアさんは紙を受け取り部屋に向かった。

部屋に着いた私を迎えたのは、絶望だった。いや、別に部屋が汚いとかそういう理由ではない
思っていたよりも綺麗だ。

「お金が無い・・・」

ジャラジャラと音を鳴らしていた彼の袋は、三枚ほど銅貨が残っていて他はすべて鉄貨だった。

私はお金があるといっても鉄貨4枚に、銅貨8枚、銀貨3枚という状況。

どんなに甘く見ても銀貨五枚を超えない。

昼に銅貨一枚だとしても、十日で底をついてしまう。

彼はそんな私の気も知らず、紙を見ている。

「夕食をお持ちしました」

コンコン、という音がした後、声が聞こえてきた。私はドアを開け
夕食を受け取った。

「朝食は声をかけて下されば、お持ちいたします」

うん、夕食も普通だ。

夕飯を食べ、私は風呂に入っている。
湯船につきりながら私はもの思いにふけていた。

「これからどうなるんだろうな」

問題が山積みだった。お金のこと、これからのこと、そして、昨晚見たあの瘴気のこと。

今日、あの時見た剣は持っていなかったが、その理由は怖くて聞けなかった。

聞いてしまったら、もう元に戻れない気がする。

「なるようになる・・・かなあ？」

初めての旅。そんな楽観的な気分にはなれなかった。こぼれたため息が白くなった。

「とりあえずですか」

湯船から出て、体を拭く。風呂場をでて脱衣所で寝巻きに着替えた。部屋ノブに手をかけると鍵は開いていた。彼は座っている、手にはあの紙。

「疲れただろう、すぐ眠ることにしよう。今日はもう遅い。」

私はその言葉に従い、すぐにベットに潜り込んだ。

彼は蠟燭の火を消した。辺りは暗くなり、静寂が訪れる。彼がどんな格好で寝ているかはわからない。

私は静かに意識を手放した。

↑5 チルル町到着（後書き）

誤字、脱字歓迎しています

作者の書いてみたかった小説 ver2

ファンフィクション&転生物

原作：野菜の名前の主人公が父を求めて三千里、のお話

詳細：オリ主。能力、相手の魔法の吸収と取り込んだ魔法の放出のみ。他の魔法の才能は皆無。基本能力値は高い。

特徴：能力の隠蔽のため、主に武器を主体として闘う。剣は刹那、投擲は楓、体術は古菲、に教わる。普通とは違いミニステル・マギ（魔法使いの従者）を後方におき、自分自身が前衛に出る、というタイプ

書かなかった理由：原作にこのようなタイプがいた、と思う。そして、後方から攻撃できる魔法使いをもうひとり作る必要があったため。そして若干明日菜とかぶる。その前に、魔法の才能が無いなら自分自身がミニステル・マギになれ！という理由から書くのを断念

↑6 ギルドと任務と闘いと(前書き)

初めてまともな？戦闘描写を書きました。

難しいですね。

『6 ギルドと任務と闘いと』

朝日が昇ると同時に、私は起きた。窓から注ぎ込む光は柔らかく、部屋の中を照らす。

寝ぼけ眼をこすり、ぐぐぐと背中をのばす。

あれ？ノアさんがいない。

「どこにいったんだろう」

ベットからだと、冷たい空気が私を襲う。服を着替えて、ドアを開け、カウンターに向かう。

うう、寒いなー。

「彼なら朝早くに散歩してくると言って、外に出て行ったよ」

「そうですか、ありがとうございます」

ギイイ

おじさんとの会話の途中、まるで図ったかのようにドアが開かれた。光が差し込み、一人の人が宿に入ってきた。ノアさんだ。

「おはようございます」

「おはよう、ミリス」

彼の姿は、昨日と変わっていないかった。手に持っている果物を除けば。

「それなんですか？」

「近くの商店の人がくれたのだ」

「よかつたら朝食に出しますよ?」

とてもみずみずしい果物は、おじさんの手に渡った。

「近々この近くで戦争が起こるかもしれない」

そう切り出したのはノアさん。朝食時とは思えない会話。さすがに噴出すような真似はしないが、呆気に取られた。そういつとノアさんは紙を取り出す。

「ここを見てくれ」

そう言われて紙を覗き込む。真っ白な紙に文字が綴られていた。

「ダルト帝国とクリエト帝国が戦うと書いてある。その場合戦うとしたらここと思われ」

地図上に円が描かれる。それはチルル町と非常に近い所の城だった。

「救援物資はおそらくこの町から送られる。敵方としては早めに潰しておきたいに違いない」

「お兄さん詳しいな。軍師か何かかい?」

「考えれば誰にでも分かることだ」

そう言いきった言葉は侮辱の意味で言ったのではないと思うのだが、言われたほうはそうとらえるだろう。実際、おじさんは機嫌を損ねている。

「なので、できれば昼過ぎにはここを出たいのだがどうだろうか？」
「わかりました」

正直どちらでもいいのだが、特に断る理由も無かった。

「護衛任務などで行ったらどうだい？今は物資の関係で仕事が多いぞ」

「なるほど、ありがとう」

朝食を終え、私たちは宿を後にした。

宿を出ると町は賑わっていた。夜には気づかなかったが、ギルドの近くには武器屋、防具屋など冒険者にとって必要な店がたくさんあった。

見るからに嚴重そうな扉を開け私たちはギルドへと入っていった。

side ノア

ミリスに連れられてきたのは、先日の”ギルド”という所。テーブルや椅子、掲示板などがある。
カウンターには若い女の人が出た。

「すいませーん」

「なんででしょうか？」

「護衛任務を受けたいのですが」

その時、後ろの方でクスクスという笑い声が聞こえた。

様々な格好のものがある。質素だが頑丈そうな鎧を着けた者。明らかに装飾過度な者。

「では、こちらにある紙に記入を」

そう言つて受付の人は、紙を渡してきた。

ミリスはその紙に記入事項を

「わたしが書くのか？」

書かずにこちらに渡してきた。

「ちよつと待て、名前を書くのは嫌なのだが」

小さい声でミリスに話しかける。

「お金も無いのですよ」

「しかし」

ミリスは一呼吸置いて

「言いたい事はそれだけですか？」

く回想く

遊んでいた僕に妹のエノアが話しかけてきた。

「お兄ちゃん、ちよつと手伝つて」

「やだー」

別にどうしても嫌というわけじゃないけど、何となくめんどうさいんだよな。

「お兄ちゃん」

エノアの声は突然低くなった。背中がぞくりとする。

「言いたい事はそれだけ？」

〈回想終了〉

あの時の無機質な笑顔は、今でも忘れない。いや、一生忘れなれないだろう。

だが、それと瓜二つの顔が目の前にそびえたっている。エノア、お前の子はお前に似て元気に育っているぞ。

頭では書きたくないと思っけていても、手は既にペンを握っている。

「あ、あの！」

天使の声。天使がカウンターの中に光臨していた。

「別に、偽名でも大丈夫です。理由があつて名前を明かしたくない人もいますし、働けるなら誰でも歓迎ですから、だから、あの、えっと、その……」

天使は悪魔ミリスの笑顔に脅えていた。悪魔ミリスは動かない。やがて、ふつ、と息を吐き出し

「じゃあ書いてください、ノアさん」

彼女も一応気にしてくれていたのか。ギルドに入ってから名前をいわないでくれたことを思い出した。

空気が和む。ミリスも紙を受け取り、記入事項を書き始めた。

「カードが出来るまで色々説明させて頂きます」

女性は一枚のカードを出す

「まずここが名前です。次にここにランクが入ります」

「「ランク？」」

「ランクはGからAまであります。Gが一番低く、Aが一番高いです。ランクを上げるためには同ランクの魔物討伐を二回する必要があります」

「何故に二回なのだ？」

「二度の偶然は無い、というのが創設者の言葉なのです。」

と、そこまで言ってカードが出来た。

「ではこちらがカードになります」

二枚のカードを渡される。一枚は私ので、一枚はミリス。手のひらサイズの大きさで、色は白。表面にはそれぞれ「ノア・エミリ」「ミリス・ベルスト」と名前が書いてあった。

「あちらに掲示板がありますよね」

そう言って指が指されたのは大きな掲示板。ガラス張りのタイプと、そのまま張られているタイプの二種類がある。

「ガラスの方は不特定多数型。主に人探し、多数の魔物討伐、徴兵などが該当します。」

もう片方は個人依頼型です。主に採取、少数の魔物討伐、護衛任務などが該当します」

「受けたい依頼を持って、私の所に持ってきて下さい」

「どれでもいいのか？」

「ランクと依頼は冒険者が決めることではなく、依頼者が決めることです」

強い口調で言うそれは、仕事に誇りを持っている感じがした。

「ランクGの奴に命を預ける奴なんかいないけどな」

「そこら辺で草むしりでもしてな」

周りからバカにしている声が聞こえている。だが、当り前だ。護衛とは守るために存在する。

自分と同じ強さの護衛では困るのかさえ分からない。よって怒る必要も無いのだが

「そこまで言う必要もないでしょう」

ミスは怒った。

他人のことに怒れるというのは素晴らしいことだ。だが今は少し自重して欲しかった。

「なんだ、じょうちゃん文句あるのか？」

男の声は明らかに馬鹿にしていた。大事にならないうちにミス

止めて謝っておくか。

「この人はあなたたちより強い！」

少し遅かった。暴れているミリスを抑え、男たちの目を見る。分かっ
つてはいたがやはり睨んでいた。

「なら、実際やってみようじゃないか」

やはり血の気が多い奴がいたか。

「その勝負受けてたちます！」

だからなぜきみが答える。男は外に出た。野次馬が何人も外に出る。
ミリスに目をやると

「頑張つて下さい！」

むんつ、と構える腕は力強く、瞳は輝いていた。おもわずため息が
でてしまった。

相手は2メートルを超える大男。構えている獲物は大剣。手入れも
行き届いている良い剣だ。

それに対し、私のは木刀。1メートルそこらだ。しかもこれは私の

物ではない。ギルドから借りた物だ。

「準備はいいか？」

大剣を正眼に構え相手が話す。木刀では少しきついかもしれない。

「ああ、大丈夫だ」

木刀を同じく正眼に構え、相手を見据える。

「最後に死ぬ奴の名前だけでも聞いておこうか」

「それはこちらの言葉だろ」

相手は怒りもせず、にやにやと笑う。

「おいテトラ、開始の合図を頼む」

「わ、私ですか」

男の仲間であろう女性がうるたえる。

「わ、わかりました」

テトラと呼ばれた女性は、こほん、と咳をし

「は、始め！」

男が砂塵を巻き上げ切りかかって来た。それを右後方に避けながら一撃を繰り出す。

「はっ」

「なかなかやるじゃないか」

読んでいたのか、切りかかった反動を利用して剣で防がれた。

仕切りなおし。相手は再度切りかかってくる。初撃より速く、振り下ろす。

一足一刀の間合い。豪快な相手の隙は大きい。剣速がそれを埋めていた。

「どおした、避けるだけじゃ勝てないぜ」

剣を剣で防げれば、柄で突くことができるだろう。だが木刀では防いだ瞬間に破壊されるのは分かりきっていた。

故に、確実な一撃を決めるしかない。最初の一撃も鎧を打った衝撃で壊れてしまうと思い、踏み込めなかった。

右上段からの袈裟切り。木刀で力を受け流す。この間合いでは完全に避けることは難しい。

受け流すだけでも手に振動が伝わる。一撃ごとに木屑が零れ落ちる。ただ待ち続ける。決定的な隙を。お互い息は切れない。言うだけのことはあるようだ。幾たびも剣が交わされる。右からの薙ぎを後方にかわす。

「くられえ！」

「くっ！？」

逆胴！？返す剣はさらなる速度を持って私を襲った。だが、薄皮を軽く切らせただけで致命傷には至らない。

追い討ちの突きを木刀で軌道を逸らす。剣は顔の右方向に逸れた。木屑が目の前で飛ぶ。

このままゆけば、いつかは剣が壊されることは明白だ。

猛攻を凌ぐ。嵐のような攻撃を、あえて接近することでその風を受けずにいた。

ゴウ！

頭の上を剣が切り裂く。体制を低くした私は相手の無防備な首に木刀を突きつける。
チツ、と、首にかすった。首をわずかに曲げることで避けられる。

ガン！！

「くっ」

左腕で相手の右肘を防ぐ。私の体は吹き飛ばされ、ざああ、と音を立てた。

攻撃方向に自分で飛ぶことによつて被害を減らす。だが元々体重差がおおきい。十メートルくらい滑って止まった。

私は、片手を地面に付け立ち上がろうとした。だが、既に追い討ちの突きが迫ってきた。今度は私が首を曲げた。ピツと音が聞こえる。相手の後方に飛び込む。後ろから、ガン！と地面を叩く音が聞こえてきた。

立ち上がり相手を見据える。首は薄皮一枚切らただけですんだ。相手の首は赤くなっている。明らかに当初とは目が違う。

冷静に獲物を見つめる獣の目。弱肉強食が常の世界での下克上を感じとったようだ。もう、攻めるのは難しい。

「これで終わりにするぜ」

上段の構え。防御を無視した構えは、一撃必殺の証。

やっときたか。

私は待ち続けていた好機を見出した。血の気の多い奴なら防御を無視してくると考えていた。

相手は左から袈裟切りを繰り出してきた。私はそれを左に避ける。髪が焦げる。だがそのくらいの避け幅でないと、間に合わない。私はがら空きとなった体に木刀で切り上げる。

side ミリス

目の前の光景に目を奪われていた。剣舞のような攻防は二人の強さが遙かな高みにあることを証明をしていた。周りの人たちも固唾を呑んで見ていた。ノアさんがすぐに負けると思っていたからだろう。剛と柔。両極端な戦いは、相手の人が上段に構えたことで終息を思わせた。

これで決まる

誰もが思った。それほどまでに空気が変わった。新たな一閃はいままでのどの一閃よりも疾く、空気を切り裂いた。ノアさんは相手の体へと木刀で切り上げた。

バキィ

ノアさんの木刀が砕けた。切り上げた木刀は切り替えされた大剣によって破壊された。木が飛び散る。ゆっくりと、ゆっくりと木は地面へと零れ落ちていった。

ノアさんは手を下げ、木刀であった物を手放した。カランカランという音は、周囲でただ一つの音であった。

「うおおおお」

沸きあがる歓声。舞台の立役者である二人はお互いに握手を交わした。

ノアさんはこちらに戻ってきた。

「悪いな、期待に添えなくて」

そついう彼に悔しさは感じられない。

「じゃあ、次こそは勝ってください」

なら、こう答えよう。彼もそう望んでいるはずだ。わかった、と、彼はにっこり笑ってくれた。

side ガムト

「見ていてヒヤッしました」

「あ、あの、お疲れ様でした」

仲間であるカミルとテトラが話しかけてきた。

「でも勝ててよかったですね」

「・・・いや、本当は負けていた」

「えっ！」

二人して驚いていた。戦いで負けることは何度もあった。だが、一対一の純粋な剣技で負けたのは初めてだった。

「最後の攻撃、奴の木刀が壊れていなければ、今頃私は地面に這いつくばっていた。」

最後の攻防。初撃は囷、本命は二撃目の切り上げ。踏み込んで逃げられない所を切るつもりだった。

事実、奴は初撃をかわした。踏み込んできて勝ったと思った。筋肉が悲鳴をあげるのも無視して、切り上げた。だが奴はそれさえも読んでいた。俺の剣筋は奴の木刀によって誘導された。

切り上げた剣は何の抵抗も無く上空へと導かれた。まるで操られていたかのよう。

体制を崩した俺は何もすることができなかった。周りから見れば俺が剣を破壊したように見えるのか。

「なあ、少し相談があるんだが・・・」

side ミリス

「お金は手に入らないけど行きますか」
「そうだな、仕方ない」

護衛任務の依頼はたくさんあった。だが、今は戦争の危険があるためそのほとんどが”Cランク以上”という条件になっていた。

「どつちに行きますか？」

この町は東西南北へ伸びる道がある。南へはリア村があり、戦いが起こると思われる地域は西なので、結果的に東か北へと制限される。

「ちよつといいか」

呼び止めてくるのは、さっきの男の人だ。後ろには白い鎧を着た男の人と、青色のフードを被った女の人がいた。

フードを被っていても女だと分かるのは、女性の象徴が”自分は女だ”と主張するためだ。

「なんかようですか」

多少怒りぎみに答える。さっきの決闘が原因であって決して私情を挟んでいるつもりはない。

「さっきは侮辱して悪かったな。おわびとしてはなんだが、一緒に任務を受けないか？」

矢継ぎ早に話される。頭の回転が追いついていかない。

「いいのか？」

「ああ、別に断ってくれても構わない。ただの自己満足だ」

「だそうだが、どうするミリス？」

そう言われてやっと頭が追いついた。つまり、ノアさんを侮辱した礼として護衛任務と一緒にやるうということでもいいんだよね？

「ミリス？」

「は、はい！？」

「どうするか？」

「も、もちろんお願いします」

喜ばしい申し出だった。お金がもらえれば少し余裕がでるかもしれない。

「旅立つ準備は整っているか？」

相手の人が聞いてくる。それに、はい、と答える。

「ならばすぐに依頼主の所に行こう」

付いて来い、と言わんばかりに男の人は後ろを振り返り歩いていく。その後を私たちはついていく。

いつかは前にいる女性のような容姿になることを望んだ

↑6 ギルドと任務と闘いと(後書き)

十話まではすぐに更新したいです

作者の書きたかった小説ver.3

ファンフィクション

原作名：武士娘ADV 真剣で恋させるお話

設定：inエミヤシロウ 基本能力はすべてあり 魔力回路増加などはなし

冒頭：前回(fate)では空、ということでは今回は”うっかり”で水中から登場。

百代に喧嘩を売った奴の部下と間違われ川神院へ行き、才能が無いということで一子の相手をさせられることになる。

特徴：人間でありサーヴァント並に強い相手にシロウが四苦八苦。京の弓の師匠となる

書かなかつた理由：原作がどちらも元々R18。

有名なんだけどねえ

17 初めての馬車（前書き）

文章量が、量が、量が――

17 初めての馬車

「ランクG!？」

ガタンゴトンと心地よく揺れる馬車にあがる大声。その声で私は起きた。

隣にはまだ俯いているノアさん。どうせこの人のことだから起きてはいるだろう。

「ちょっと聞いてないよ」

叫んでいるのは依頼主であるゴラスさん。手には指輪、差し歯は金色と絵に描いた金持ち。

「まあまあ、実力は確かですから」

そうなだめるのはガムトさん。馬車に乗る前にお互い自己紹介をした。その巨体と大剣が印象的で、茶色のあきらかに重そうな鎧を身に着けている。とてもきさくな人だ。

「だが、ランクGに護衛がつとまるのかね？」

「それについては僕が説明します」

そう言うのはカミルさん。白の鎧に身を包み、腰には片手用の剣を携えている。細身で、この人が金の管理、準備支度など頭脳的役割をしているらしい。

「先ほど、そのガムトと彼は決闘をしましてね。ガムトに勝てはしなかったものの、戦力としては充分と思いい緒に来たわけです。」

彼らも移動したがってたようでしたし」

依頼人は疑わしい目でノアさんを見ている。

それも仕方ない。なぜなら、ノアさんは出かけるときに買った無骨な鉄の剣しか持っていなかった。

ノアさんは黙っている。目を合わすことも無く、ただじっと座っていた。

「君、何か言ったらどうかね」

黙秘。それが彼の回答だった。慌ててカミルさんが

「実力は我々で理解しています。必ずあなたを守り、御代もそれ以上頂きませんから。」

「ならばいいだろう」

つまり、お金をこれ以上請求される事を恐れていたから、こんなにも反対した。

実に器の小さい依頼主だ。

ちなみに、スースーという音をたて、まだ心地よく寝ているのはテトラさん。青いローブを纏い、腰には小さい杖。後方支援担当で魔法で戦う。

胸は大きく、顔は綺麗。

・・・神様、二物を与えないんじゃないんですか。

馬車は森を抜け、辺りは草原が広がる。

「魔物か・・・」

と、いきなりノアさんが呟いた。彼の体制は変わっておらず、外も見ずに言った。

ガシャンと音をたて、ガムトさんが御者席に足をかけ外を見る。手綱を握っていた青年が驚いていた。カミルさんは後ろの幕を少し開け、後ろを確認する。一瞬にして空気が殺伐となる。テトラさんはまだ寝ている。

馬車は周りを布で囲んでいる種類のため左右を確認する小窓は付いていなかった。

「いないじゃないか」

「こちらにもいませんね」

二人から拍子抜けの音が漏れた。カミルさんが幕から手を放し、ガムトさんがガチャッとこちらを向いたときだった。

「おわっ!」「よつつつと!」

ザアアと砂埃を巻き上げ、馬車が急停止した。ガムトさんとカミルさんは足を踏ん張り耐える。ガンツと音をたてたテトラさんは、頭の左側をさすっている。

私というと

「う、ごめんなさい」

体制を崩し、右側にいたノアさんに抱きついていった。それでも彼は微動だにしない。

・・・いや、それはそれで複雑なんだけど。

「なにごとか！」

「御主人様！魔物でございます！」

御者席にいた使用人さんが叫ぶ。地平線の手前から魔物が五匹駆け抜けてきた。

黒い狼。その体からはやはり瘴気が噴出している。

「守りは任せた！」

そうやってガムトさんたちは馬車の外に出た。馬車の中のノアさんはまだ座っていた。

side ガムト

馬車の外に出て、迎撃体制をとる。俺とカミルが、テトラの左右前方に出る。テトラが魔力を外に向けて放出する。いつもどこか抜けているが、魔法の腕は一級品だ。

しかし、あと二キロという所で魔物のほうが止まってしまった。テトラ曰く、魔法は一定の場所で行うほうが効率がいい、ということ

らしいが。

「やあつ！」

掛け声とともにテトラが杖を振るった。杖の先からは緑の矢のよう
なものが放たれる。

だが、その矢は地面に穴を開けただけで、敵に当たることはなかつ
た。

「距離がありすぎますー」

泣き言を漏らしている。時間がかかるからこつちから行くか！

「攻めるぞ」

言うと同時に大剣を横に携え接近する。俺が前の敵。カミルがテト
ラの護衛兼討ち漏らしの始末。

テトラは俺の左右の敵を攻撃するという役割だ。

距離にして残り一キロという時だった。

魔物たちは突然踵を返し、タッタッタ、とどこかへ逃げていってし
まった。

「なんなんだよ」

せつかくいれた気合を振るうことなく、俺たちは馬車に戻っていつ
た。

side ミリス

「すごい・・・」

それしか言葉に出なかった。ガムトさんたちはその立ち振る舞いだけで、魔物を追っ払っていった。

だが、馬車に帰ってくるガムトさんたちの表情は、どこかおかしかった。ノアさんはまるで当り前かのように労いもしない。

「魔物が勝手に逃げたんだ」

「僕たちは特に何もしていないんですが」

「こんな事は初めてです」

今回のことには一抹の不安が残った。何か変なことが起きているんじゃないか、と結論が出た所でカミルさんが

「それにしてもすごいですね。4キロ以上先の魔物を感知するなんて」

「4キロ以上先？」

「地平線までの距離ですよ。厳密に言えば4・5キロですが」

「私は、感知だけは他よりも優れているのだ」

と、ノアさんが馬車に乗って始めて話した。呟いたのではない、会話をした。

「テトラ、と言ったか」

「は、はい！」

「魔法は誰かに教わったのか？」

「は、はい！」

威圧に脅えているのか、同じことしか喋らない

「私も使ってみたいな」

「なんらな教えてあげましょうか！」

すごい勢いで私に振り向いてきた。目には若干の涙。私の手を両手で握り、ありがとう、と今にも言いそうな雰囲気だ。

「じゃあちよつと失礼しますね」

と言って私の後ろに座る。私の背中と腕を触る。私の前では口調がお姉さん口調になっている。

「少しチクツとするかもしれないけど我慢してね」
「んっ」

体の中に異物が入り込んでくる感じ。気持ち悪いわけではないが、なんともいえない感じに思わず身をよじる。

テトラさんが触れている箇所が熱くなる。その内にその間も熱くなつて来た。

テトラさんの手は徐々に腕から手に移っていき、やがて指先に達した。左腕が熱い。

「じゃあ、指先から風が出るイメージをして」
「うーん……」

指先から風が出るイメージをするけど、一向に風は出ない。テトラさんも首をかしげている。瞬間、ヒューと、そよ風が流れた。

「やった！、できました！！」

「え、ええ、よかったわね」

なぜだろう、魔法がうまくでたのにテトラさんは腑におちていなかった。

でも、魔法が使えてすごくうれしい！

「火の魔法も使ってみたいです！」

「むりよ」

と、今度は断られた。拒絶の言葉では無いようだ。

「使えないのよ、火がないと」

「？、なぜですか」

「それはね、『魔物だ』！」

おとなしい声を淡々とした声が遮る。ガムトさんが前方を確認する。今度はゆっくり止まった。

魔物はまだこちらに気づいていない。その巨体はガムトさんよりも大きいことが遠目からでも分かる。

「守りは『まちなさい』・・・なんですか」

依頼主が気合充分のガムトさん呼び止めた。

「今度はその彼に行かしてみなさい」

と座っているノアさんを指差しそんなことを言った。ノアさんは座ったまま、

「いいだろう」

そう口を開いて、ひらりと外へ出て行った。私も後に付いて行く。スタスタと歩く姿は、まるでどこかに出かける様だった。敵もこちらに気づくが、向かってくる気配は無い。

人型の魔物はじつとこちらを見ている。高さは5メートルくらい。腕は丸太以上に太く、長い。

のこり400メートルくらいに近づいた。

「ミリス、射てみてくれ」

私は、弓を引く。ヒュンという音と共に放たれた矢は、中りはしたが狙い通りの所には中らなかつた。

魔物は避けようともせず痛がりもしなかつた。

「効いてないようだな」

「そうみたいですな」

悔しい。もう少し近づけば、狙った場所により強く中てることができるけど、攻撃を避ける自信がない。

「ふむ、仕方ないか」

どうせ、私はお留守番だろう。

「私が敵を引き付けるから、後ろから攻撃してくれ」
「えっ！」

意外な提案だった。相手が大きいとはいえ、ノアさんなら勝てると思っただけ。

ノアさんは私の返事を待たずに切りかかる。だけどその強さは、あの晩に届かない。

あの晩が烈風なら突風。最初だけ強く吹いて、その風は止んだ。

大振りの攻撃は決して彼に当たることは無い。だけど、相手の体制が崩れた時しか彼は攻撃しない。

私は矢を射続ける。

「いい、矢は的に中ることをイメージしてから放つの。中たる事意外は考えないようにするの」

母の言葉。今でも心の中に残っている。弓と魔法はどこか似ていると思う。それが体外か体内か、それだけの違い。

外界の情報を遮断し、中ることのみイメージする。

狙いは目。放たれた矢は、狙いどおり中り、目から緑色の液体を流す。

目に刺さった矢が相手の右目を緑に染めていく。

「
\$
」

声にならない叫び。それは魔物のもの。私の矢が相手の視界を奪った。雑な動きはさらに雑になる。

ノアさんは相手の右側に動くけど、攻撃するのは大きな隙の時だけ。ノアさんは紙一重で攻撃を避けている。けどそこに不安はない。

紙一枚の薄さは、本のように厚かった。

荒れ狂う嵐が地面の形を変える。元の面影は残っていない。と、私の矢が残った左目を射抜いた。

魔物は叫ぶ。荒れ狂った魔物はただ腕を振り回している。

「あたれっ」

そう思っ放った矢は腕によって阻まれた。

魔物はこつちを見てきた。視界は既に奪っていたけど、確かに凝視している。

駆け抜ける。魔物にとってはただの防衛本能。しかし、安全だった距離を一瞬で無くされた。

魔物が腕を振り下ろしてくる。何も出来ない。天を覆う黒い闇は次第にその暗さを増し、私は目をつぶった。

ザシュ

「キャ」

突然の風に私は倒れた。おそろおそろ目を開けてみると、目の前には魔物が横たわっていた。

助かったの？

「大丈夫か」

ノアさんが駆け寄ってくる。急いで駆け寄るその姿は、戦っている時よりも焦っていた。

やはり、根は優しい人だ。ピクピクと動く魔物をノアさんは首を切つて殺した。

「だいじょうぶかー」

ガムトさんが大きな声で呼ぶ。馬車が近づいてきた。

差し出された手を掴み、私たちは馬車に乗った。

倒した魔物の横を通る。ガタガタと振動する中、魔物の足が切断されているのが見えた。

やっぱりこの人が助けてくれたんだ。

嬉しい反面、どこか寂しい。

「ふん、なかなかやるようだな」

依頼主が喋る。悔し紛れのように聞こえる声は、彼の实力を認めていた。

「町が見え始めましたよ」

私は、ひょいっと前方を見る。その町は後ろに海を構える大きな町。港町シーヘッド。

それが、私たちの目的地であり、私の見る初めての海。

磯の香りが私の鼻をくすぐる。

17 初めての馬車（後書き）

短編（f a t e ギャグ）もよかったら見てください

⑧ 苦い思い出 (文字通り) (前書き)

短編のほうを書くのにはまってきた。(主にf a t e)

『8 苦い思い出（文字通り）』

「元気でな」

「お疲れ様でした」

「またお会いしたいです」

「達者でな」

「ありがとうございました」

別れの挨拶。町の門で私たちは解散した。泣きはしないけど、やっぱり寂しい。

テトラさんは何度も何度も手を振ってくれて、カミルさんは会釈、ガムトさんは挨拶をしただけ。それぞれの性格がよく表れてると思う。

馬車の中で依頼両である白金貨八枚の内三枚を貰った。向こうは”半々にしよう”と言ってくれたがさすがに断った。元々私たちだけじゃ受けられなかったんだ。だから気がひけた。

「ミリス」

別れて、数秒もしない内にノアさんが呼ぶ。彼はと言うと、見えなくなるまで見送ったものの、両手を組んだまま会釈だけしかしてない。

「なんですか」

「依頼主の名前をいってみろ」

「な、なんですか!？」

「馬車の中で一度も呼んでなかったからだ」

確かに名前を覚えていないけど、馬鹿にされるのは嫌だ。こっちはとにかく平静を保とう！

「お、おぼえちえりゆ……」
「やはりか」

舌が痛い。腫れてないかな。

「いいか、名前はきちんと覚えておけ。それが偉い人ならなおさらだ」

はあ、また子ども扱いされた。くどくどと説教？を続ける彼の言葉を受け流す。血縁関係でいうと、この人は私の叔父に当たるが、見た目が二十歳前後なので少し歳の離れたお兄さんみたいに感じたりもする。

「さて、まずは宿を探すか」
「そうですね」

やっと小言が終わった。太陽は海に沈んで、その姿を半分だけ隠している。

歩き出すたびに、私は人にぶつかりそうになる。私の視線は、橙色の海に奪われていた。

「すまない、宿の場所を聞きたいのだが」

目を放した隙に、彼は露天のおばさんに話しかけている。

「……」

おばさんの目は確かに彼を捕らえている。でも、何も話さない。なんでだろう。

「一つ貰おうか」

彼は鉄貨を一枚手渡す。

「宿なら、ここをまっすぐ行けばどっちもあるよ」

と、陽気な声をあげて彼に果物を手渡した。さすが商売人。儲ける時に儲ける。

ノアさんの隣を歩く。海は建物に隠れ見えない。ポーンポーンと暇を持て余したかの様に、彼は果物で遊んでいる。そんな私の視線に気づいたのか、

「食べるか？」

と、買った果物を手渡してきた。初めて見る食べ物。恐る恐る口にしてみる。

・・・んぐ!?

「し、しぶい」

しぶかった。熟し切れていないんじゃないかというほどにしぶかった。しぶいという表現を飛び越えるほどしぶかった。

「なら、無理して食べる必要はない」

と、彼は私の手から果物を奪う。そして一口かじった。

あ、間接キス・・・

「・・・・・・・・!!?」

そうそう、後からくるんだよね。

「ん、たしかにしぶいな」

そう言っつて二度と口にはしなかった。

宿にはすんなりと入ることが出来た。

石造りのため錆びは無く、突風を防ぐためだと思うけど、石造りの二階を西側に突き上げていた。

「部屋は二階になります」

受付の人から鍵を貰う。その鍵はいつもの鉄ではなかった。

「不銹鋼か」

ノアさんはとても珍しい物を見たように感心している。

そんな彼と、手にある鍵を見比べる。確かに鉄とは違つようだけど？

「錆びにくい鉄ですよ、お譲ちゃん。海の近くだから鉄だとすぐに錆びてしまつんですよ」

受付の人が説明してくれた。そして、嬉しいことに私を一発で女の子だと分かつてくれたことに感謝する。

「だが高価なのでは？」

「いえ、鉄だとすぐ使い物にならなくなりますから。少し高くても長く使える物の方がいいんです」

そうして私たちは部屋に向かった。

鍵を開け部屋に入る。もうすでに日は落ちていた。蝋燭に火を灯す。ポウツつと音をたて辺りが照らされる。私と彼は椅子に向かい合わせに座る。意を決し、疑問に思っていたことを投げかけた。

「どこか調子が悪いんですか？」

「何故だ？」

彼は表情を変えず、感情を乗せず私に問いかけてきた。その瞳は明らかに警戒している。

「魔物との闘いの間、動きがどこか鈍かったからです」

強く言い切る。怪我をしているなら確かめないといけない。一緒に旅をしていくんだから。

「いや、問題ない」

肩を竦め、彼は答えた。あきれた顔は安堵の表情に見える。

「速く動いたら、私に中ることを恐れ射れなくなると思ってな」

もっともらしい理由。だけど心の中でどこか引つかかる。小さいけど、とても大事な様に思える。

「じゃあ、『ご夕食の準備が整いました』」

ドアの外から女性の声が聞こえた。パタパタと歩くその音は遠ざかっていく。

夕食はバイキング形式らしく、一階の広間に集まる必要がある。

「もうこの話は終わりだ。夕飯にするとしよう」

彼はドアを開け、外に出て行った。部屋に残った私の影が揺らめいた。

「しづいな」

「しづいですね」

料理を皿に盛り、椅子に座る。手に獲った果物を口にして二人で咳いた。

「ここらへんの果物はしづいものなのか」

彼が、近くにいた青年の従業員にたずねる。青年は何かに気づいたように、

「ケルンの実を食べたでしょう」

「？」

「緑色の丸い実ですよ」

たしかにそんなような形だったなあ。

「生で食べるとしづいし、調理をするにも手間が掛かるんで人気無いですよ。それでも一部の料理には必要なんですけどね」

なるほど、私たちは都合の良い在庫処分者だったと。

「あちらの果物は甘いので食べてみてください」

と言ったところで青年は仕事に戻ってしまった。言われた場所から、ひよいつ、とつまんで食べてみる。んっ、甘い。行儀が悪いと言われようが、まだ子供だからそこらへんはおいとく。

ここはどうも特別な宿らしい。冒険者という時間に無頓着な職業の人たち相手にバイキングという食事形式だし、風呂は個別、寝具も全てベット。

値段は他と変わらない。実に良い宿。

「で、今後の方針についてだが」

食べる手を止め、彼はこちらを見る。私も手を止めて彼の言葉を待った。

「少し信頼の置けるランクまで上がろうかと思うのだが」

確かに、チルルでの一件は重要な出来事だった。ランクが高くなければ、護衛任務は受けられない。

移動手段がない私たちにとっては、護衛任務は唯一の移動方法だ。

なお、徒歩で行こうと思えば行けるのだが、携帯食料を買ったり、寝袋を用意したりと何かとお金がかかる。移動の度に買っていたら、この極貧の旅は即壊滅だ。

「そうしましょう」

当然のことだと思う。

「ではその方向で」

そう言って話は終わった。短いけど充実した内容だ。明日はギルドに行きランクを上げる。そう決定したところで、私たちは部屋へと

戻った。

彼は明かりを消す。辺りは暗く聞こえるのは、彼の足音と波の音。けれどその足音もすぐに聞こえなくなる。

波の音を子守唄代わりにして私は眠った。

燦燦と降り注ぐ日差しが、私を”おきておきて”と急かす。子守唄代わりだった波の音も、今となっては騒音にしか聞こえない。

まだ、眠たいな・・・

「・・・げん・・・ろ」

遠くの方から声が聞こえる。聞いたことのある声、けれどそれも五月蠅い。より深く布団を被り、その騒音を少しでも防ぐ。

「・・・かげん・きろ」

加減？キロ？体重の話だろうか。

ああ、そういえば旅で少しは痩せたかなあ・・・

そう思いまた深いまどろみに入る。すうつ、という音が聞こえて、

「いいかげん、起きろ！」

引き剥がされる布団と怒声。私はすぐに目が覚めて、おもわず両手で耳を押さえた。耳がキーンと鳴っている。

「やっと起きたか」

ノアさんが腰に手を当て呆れ顔をしている。そんな彼は窓の外を指差し、

「もう昼だ」

ああ、昼か。戦争に巻き込まれたとかじゃないのね。そんなことで起こさないでほしい……

「昼!?!」

慌てて窓の外に駆け寄る。太陽が真南に昇っていた。外では大勢の人が働いている。

「どうして『何度も起こしたが、起きなかった』あ、そうですか」

やはり考えていることを読まれるのは不利だ。後手後手に回ってしまおう。

「すぐに支度をします」

着替えがあるため、彼には宿の外に待っていてもらうことにした。すぐに着替え、立てかけておいた弓を持って外に出る。

「お待たせしました」

「では、行こうか」

彼はやはり１メートル程度の無骨な鉄剣しか持っていない。

そんな彼の隣をてくてくと歩く。すると、昨日のおばさんに出会った。

「もひとつどうだい」

昨日と全く同じ笑顔、同じ実を持って話しかけてきた。

「ケルンの実かい？」

彼は冗談交じりに言い、二人して笑った。

「これは大丈夫だよ」

昨日とは違う実を二つ渡してくる。いまひとつ信じられない。またね、と言われその場を後にした。

彼はおいしそうに食べている。私もカプリと少しだけ噛んだ。

「あ、甘い」

あのおばさん良い人だな。また行こうかな。

「良い人だと思っただろ」

え！？顔に出た？

「あれはそういう狙いだ。最初に悪印象を与えておき、次に好印象を与える。すると最初に良く接したときより効果がある」

まあ、良い人は良い人だけだな。と、彼は付け足した。

ギイイという音を立てて、私たちはギルドに入った。

やはり何人が座っている。掲示板に行つて、魔物討伐の依頼がないか確認する。

「ありませんね」

けれど、魔物討伐の依頼はなかった。あるにはある、だけど全てGランクのではない。

「すまない、魔物討伐の依頼はないのか？」

受付の人に聞いてみる。お姉さんは、

「ランクを上げるためですか？」

「そうだ」

「ランクを教えてくださいませんか」

「Gです」

少々お待ち下さいと、彼女は何か調べている。数分も経たないうちに、一枚の紙を取り出した。

「これが討伐リストになります」

「依頼ではないのか？」

「低いランクでは依頼は少ないのです」

と、言う説明を受けた。

「南の森にいるリスト上の魔物を倒して下さい。その時に倒した証明をお持ち下さい」

魔物の絵と、倒した証に必要な物が書いてあるリストを貰いギルドから出ようとする。

「やったぞー！ー！ー！！！」

広間に一際大きい声が揚がった。その人たちは、見たことのある頭を持っていて。昨日、苦労して倒した魔物の頭だった。

「はいですね。ことはいえタフですのに」

「まあ、俺たちにかかればな」

と、男たちは自慢げに話している。カチンときた。文句を言ってやらなくちゃと思い、歩き出した時だった。

「むぐ!? んーんー」

いきなりノアさんに口を塞がれ、ズルズルと外に連れて行かれた。

「私たちが倒した魔物とは違つかもしれないだろう」

色々言う私を彼はそのように説得した。二の句がつけない。一生口では勝てない気がする。

「行く前に、何か買うものはあるか」

「ないです」

「ならば、すぐに行こう」

歩む彼の隣を渋々歩く。背中には弓と矢。カチャカチャと歩くたびに音が鳴る。私たちは森のある方向へと歩いていく。

街の門を出て、目の前に見える大きな森に入ってしまった。

「この魔物が多いらしい」

と彼は一点を指差す。もともとその動物が多いから魔物も多いのだろう、と彼は言う。

森を歩いていくと、やがて広い草原に出た。そばには大きな湖。澄んだ水は湖の底まで見ることが出来た。

「少し休もう」

彼は地面に腰を降ろした。私も腰を降ろす。町を出てから歩き続けたため、少し疲れていた。

小鳥が歌う。獣が叫ぶ。風が奏でる。そんな自然の合唱。そこに不自然な音が鳴り響く。

ヒュンツっという音、キンツっという音。

音はすぐ近くから聞こえてきた。見ればノアさんが剣を抜いている。

「魔物ですか!？」

いつ襲われても良いように、すぐに射れる準備を整える。

「魔物なら、よかつただけだな・・・」

そんな私の動作とは対照的に、彼はゆっくりと口を動かした。

彼の足元には一本の剣。鋭い剣は、小さいがはっきりと見える。

殺すためだけの存在は、ただただ黒かった

↑ 8 苦い思い出 (文字通り) (後書き)

不銹鋼ふしめつこう 〓 ステンレスです。

横文字を極力入れないと言って、わざわざ漢字を書いたのですが、
バイキングって書いた時点で意味ないですよ。

誤字、脱字お願いします。

く作者の構想練り中の小説く 聖杯戦争 く叩いて被ってジャンケ
ンポンく

なお、この小説のタイトルだけで作者が fate の誰の名台詞を書
きたいか分かった人もいるでしょう

19 闘いという名の殺し合い（前書き）

戦闘パートだけで作った今回。

戦闘中にだす声がよくわからない。

そしてサブタイトルにルビが触れないという作者の不甲斐無さに絶望

19 闘いといづ名の殺し合い

ヒュン ヒュン ヒュン

キン キン キン

音が鳴り響く。黒い閃光は容赦なく彼を襲う。すでに数十本の剣が地面に突き刺さっている。

「くっ！くっちだ」

彼が私の腕を強引に引く。行く手には森。私の重さなど問題にならないかのように彼は駆ける。

森まで後十数メートル。この速さなら五秒もかからない距離。だけど彼は突然何かに吹き飛ばされた。

・・・ちがう、自分で吹き飛んだんだ。

全力疾走している体を直角に飛ばす。筋肉は捻じ切れ、苦痛が伴うその技を、彼は当然のように行った。

私たちが一秒後にいたはずであろう場所にその凶器は刺さっている。そしてなおその地点に降り注ぐ剣の雨。

彼は剣を構え、投擲に備える。それを待っていたかのように再開された投擲。黒い閃光を彼は確かに捕らえていた。

後ろには湖。綺麗で透き通る水は、水の中に居る者全てを認識させる。

たとえ、それが人間でも……。

水中に逃げた途端、狙い撃ちにされるのは、私でも分かった。

左右にも後方にも逃げられない。残された道は前方のみ。

じりじりと、一歩一歩相手に近づく。だんだんと疾くなる凶器を、彼はさらなる疾さで防ぐ

キン、キンという音はだんだんと早く、鋭くなっていく。それと同じように彼の剣も疾くなっていった。最初は踏み出していた足も、すり足になっていく。だけどその歩みは止まることはない。

たしかに目標てきまに向かって進んでいった。

何十何百という閃光をみても、私の目は投擲物を捕らえることは無い。だけど私たちが歩いてきた道がはつきりとわかる。地面に刺さった黒い剣が、雑みぢな杵きねを作っていく。

「ちっ！」

彼の苦痛な声と共に、止まらない前進もやがて終息を向かえた。突然一歩も進まなくなった。

防ぐだけで精一杯になった？

違う、彼はまだ服も切らしていない。

動けなくなった？

違う、足に怪我などしていない。

私はある一つの光景を思い出す。チルルでのガムトさんとの戦い。

あの疾い攻撃を、彼は紙一重で避けていた。剣を使わないで避けていた。投擲物は小さいとはいえ、避けられないほどではないと思う。もう一度、彼の動きを見て先ほどまでのちがいに気づいた。

動けないのはあっている。彼は攻撃を避けないんだ。避けられないんじゃない、避けない。全部の攻撃を弾いていた。

黒い閃光が狙っていたのは、彼ではなく私。彼は自分の体では無く、前の空間を守っていた。

前進も後退も許されない。此処はどこまでも広がっているようで狭い檻。

檻に閉じ込められた獣かれは、ただ弱っていく末路を辿る。調教師の良いように操られる獣けんの牙は

バキン

無理な調教により壊れた。

「くそっ」

私を抱いて避ける彼。肩口から黒い線が見えた。一瞬だけ顔を歪めた彼は、すぐに立ち上がる。

立ち上がった時に見えた。彼のベルトの裏にはあの指輪。初めて会った時にみた銀色の綺麗な指輪。右手を指輪にはめ、指を曲げて引っ張ることでその指輪をベルトから取る。

「コンクールド
収束」

彼が呟くと同時に指輪が光る。指輪が黒く光る。光はやがて収まり、彼の右手には漆黒の剣が握られていた。黒い瘡気が剣を纏っていた。

両手で剣を握る。飛んでくる剣の弾幕を壊す。軽く触るだけでその軌道は変えられた。足は先ほどよりも早く歩む。いける！と思ったときだった

バシヤ

突如、森から龍が現れる。龍は水から作り出されていて、魔法だとすぐに分かった。

龍は私たちを飲み込むように天高くから地面に落ちる。だけどそこに私たちの姿は無い。

龍はこちらを振り向くことなく

パンッ

ただの水へと戻った。

龍は首を切られ死んだ。激流のごとく流れた水は投擲された剣を飲み込み、剣は水の滝に叩き落され私たちに届くことはない。

地面はぬかるみ、彼の機動力を削った。

風の刃が彼を襲う。三個の緑色の鎌は、彼に一直線に飛ぶ。だがそれを、一閃で消滅させる。

パンッという音と共に風が吹く。ビュウツ、と、強い風は私を退か

せる。

だが守護者は決して退かない。

ただの一度の攻撃も彼に届くことは無い。

ゴゴゴゴという音が響く。地震にもよく似たそれは、地面から塊を取り出した。

土の壁がゆっくりと飛んできた。目の前が全て土色に染まる。

確信する。避けることなど不可能。だけど防ぐことは可能。迫り来る壁、けれどそれも意味を成さない。彼が剣で切ると、すぐに唯の土へと返っていった。

「ぐっ」

突然のうめき声。足に剣が刺さっていた。それは剣と呼ぶにはあまりにも細く、小さかった。

彼は前のめりに倒れそうになる。しかし倒れない。しっかりと前を見据えていた

今までののは伏線。本命の一撃は彼の速度を奪った。

「棒剣に・・・毒か」

「」名答」

二人近づいてくる。その姿は山賊のようにみすばらしくなく、騎士のように高貴でもない。

どこにでもいるような格好だった。

ノアさんは立つ。血を流しながら、それでも剣を構える。相手も足を止め、剣を抜く。

距離にして10メートル。いつものノアさんなら一瞬で詰められる距離。

だけど攻めるのは相手。怒涛の攻撃をノアさんは防ぐ。足を踏ん張るごとに血が噴出す。

血は土と混ざり赤黒くなる。彼の足に絡みつくそれは亡者の手。地獄へと誘うその手を彼は振り払いながら戦う。振り払ったばかり新たな手が彼の足に纏わりつく。

「死ねよ！」

相手は急所を狙ってきていない。その狙いは胸。足が動かないため上半身だけで避ける彼の動かない場所。堅実で確実な攻撃は、徐々に彼の体力を奪っていく。

私も弓で応戦する。けれど、後ろの魔法師が常に私を見ている。右に行けば右に、左に行けば左に魔法が放たれる。

放たれる魔法は、確信に似た死の予感をさせる。

魔法が放たれるたびに私を護るため彼は動く。その度に無防備となった胸に攻撃が入る。

足の血だけで作られていた小さな水溜りは、上から流れてくる血と合わさり大きな水溜りを作る。私は動けなかった。彼の背中を見つめる事しかできなかった。

「ほら、どうした!!」
「ぐっ!?!」

彼に限界が来た。彼は吹き飛ばされ、地面に仰向けに倒れた。追撃に備えすぐに立ち上がるうとするが、それもできない。立ち上がった彼は、すぐに片膝を付いた。

「とうとう立てなくなったか？」

敵の嘲笑う声。彼は剣を杖代わりにして、立ち上がるうとする。足はガクガク震えている。立つだけでも歯を食い縛っている。

不屈の闘志。

それは、護るという意志の表れ。彼一人なら簡単に逃げられた。

私という邪魔者あしてまといがいたから、彼はここで命を落とす。

あの時の再現。私がいたから皆死んだ。私がいたから皆殺された。私さえいなければ・・・

もう二度とあんな思いはしたくない

私の服の中から光が漏れる。それはそれは小さな光。けれどそれは希望の光。

光は私の思いに呼応しているかのようにだんだんと大きくなっていく。

「「!?死ね!」」

二人同時に攻撃が来る。投擲と魔法。逃げることなど出来ない。頭の中に”死”の一文字しか浮かばなかった。

「ぐっ!」

だけど攻撃は私に届くことは無い。ノアさんが防いだ。

魔法は剣で防ぎ、投擲は彼の体で防いでくれた。私の顔に生暖かい血が飛び散る。体から剣が生えている。それは父の最期の姿と瓜二つだった。

「ノアさ『コンクルード収束だ』!?」

ごぶっ、と彼は血を吐く。赤い水溜りは、さらに大きくなる。ただ彼は止めない。

「早くコンクルード収束と見え!」
「コンクルードコ、収束!」

脅しにも似た声は私から思考を奪っていた。

光は最大に光る。光は神々しく目の前を白くした。光が弱くなる。だけど無くなることはない。私は目を開いた。

私の手に見慣れない物が握られていた。

白銀の弓。銀の飾りが握り手を守る。太陽の光を受け輝いている弓は、この戦いの中、目を逸らしてはいけなはずなのに、弓を見続

けることしかできなかつた。

体から力が沸く。今なら何でもできる。

そんな気がした。

「ここで倒すぞ！」

「させるか！」

そんな気がしただけ。

やっぱり劣勢だった。私を警戒しているのか、相手は常に私との間に手負いの彼を挟む。

周りながらも常に投擲が続く。彼は血を吐きながら、それを防ぐ。座ることさえ出来ない。距離をとられ、攻めることさえ出来ない。

絶妙な距離。剣の長さよりもほんのわずかだけ、けどそのわずかが届かない。一步踏み込むだけ。だけどその一步が踏み込めない。

地面に円が描かれていく。

終わりの無い鬼ごっこ。

その終わりは、彼の死でしか迎えられない。

力があるのに誰も救えない。誰一人救えない。涙が溢れてくる。だめだ、彼にこれ以上心配をかけてはいけない。

せめて一秒、けれどその一秒がこない。

「ならば私が造るっ」

え!?

低く呟くような声は彼のもの。血とともに捻り出された声はいつもの声。

私の顔が分からなくとも、私の声が聞こえなくとも、考えだけは理解してくれた。

「んっ!」

投擲を体に受ける。左肩に受けた剣に怯むことなく、彼は右腕だけで黒い剣を強引に振った。

「ガアアア!!!!!」

相手は怯んだ。目の前には泥、目潰しを防ぐため相手は両手を顔にした。

「グワ!?!」

泥に塗れている鉄の剣が相手の腹に刺さっていた。深々と刺さる剣は、相手の腰を折らせる。

奥にいた魔法使いが見える。とっさに何かを呟いている。

彼が必死で作ってくれた一秒。ここで期待に応えないで、いつ応える!

私は弓を引く。世界は急速に狭くなっていく。視界には魔術師の顔しか写らない。

ビュウン ザクツ

銀色の弓で放たれた矢は頭を貫いてもまだ進んだ。眉間を貫かれた魔術師は前のめりに倒れる。

ノアさんは振り上げた剣を、左肩に刺さっている棒剣で受ける。剣はさらに彼の体に食い込む。けれど彼は気にしない。

左肩ごと相手に切りかかった。

斬首刑に差し出されたような首。体ごと切りかかる彼。

その動作が、剣だけでは届かない距離を埋めていた。

ダンツッ

首が飛ぶ、剣が地面に刺さる。彼は倒れこむ。それを見届けて私も倒れる。

地面が暖かい。汚いなと思っていても、起き上がる気力も無い。目を開けているの疲れる。

そのままゆっくりと目を瞑った

19 闘いという名の殺し合い（後書き）

果てしなく遅い人物紹介

ノア・エミリ（クリフ・ラビエルト）

黒髪蒼眼、短髪で射抜くような瞳

身長、180強

筋肉質な体で、右目の上に三センチ程度の傷

年：見た目は二十歳、本当の年齢は不明

主な武器 剣

基本無口

主人公たちの設定は基本後付です。

¶10 気持ち(前書き)

少し知的な文章にしたつもりが、作者でも意味不明な文章にorz

「くしゅん」

周りが寒くなって、私は起きた。周りには何も無い。ただ地面が濡れているだけ。

誰の姿も無い。血を流しながら護ってくれた彼も、襲ってきた敵の姿も無い。ただ、私一人がぼつんというだけ。

「
」

口を押さえ、こみ上げるものを抑える。けれど、耐え切れない、耐えられない。

膝を着いて、勢いよく吐き出した。

黄色い液体が口から出る。胃がひっくりかえりそうだった。

人を殺したんだ。

吐き出しても、吐き出しても、まだ吐き出す。

人型の魔物を殺した経験など少しも役に立たない。弓だから殺す感触を直に味わってないということなど少しも意味がない。

人を殺した、この手で、わたしが・・・

他の誰でもないこの私が人を殺した。

すっぱい臭いが鼻につく。そんなもの気にならない。

矢を放てば、人は死ぬ。そんな当り前の事。護るため、と言いついても私の心は晴れない。

「……気持ち悪いな」

胃の中の物を全て吐き出したところで私は一旦落ち着いた。

気持ちはまだ晴れない。晴れることは無いのかもしれない。

とりあえず、水で口をすすぐ。バシャバシャと血を洗い流すように。

「……私ってこんな顔なんだ」

揺れる水面に移る顔はとても酷く脆い。ぽちゃんと揺れる水面がそんな私の顔をさらにくしゃくしゃにする。

「目覚めたか」

振り向くとそこには一人の剣士。

「……ノアさん」

私を護った剣士は夕日を背に立っている。体中が傷だらけだけど、生命の鼓動ははっきりと聞き取れた。

ポロポロと涙があふれ出す。

もう二度と会えないと思っていたから。もう二度と言葉を交わせな

いと思つていたから。

side ノア

目が覚めた。体の節々が痛い。いい加減この痛みにも慣れたい。傷は塞がっており刺さっていた剣も抜けている。

「ぶっつ」

相手の体を探る。・・・!あつた。赤色の箱は、ミリスが腰につけている財布と同じもの。

もう一人のも探すか。ふむ、こちらも同じようなものか。

二人で白金貨3枚、銀貨6枚、銅貨4枚、鉄貨1枚。確かに袋の中にしまった。

物に善悪はない。それが私の考え方だ。

ズルズルと死体を引っ張る。右手で足を、左手で足と髪の毛を掴んで森へ行った。

明日までには動物の餌になっているだろう。

「もう、目覚めているところか」

森から出る足取りは重い。

神経毒、それが棒剣に塗られていた毒の名。傷は治ったが毒は体を蝕む。それもだいたい取れたが、本調子にはまだ遠い。

巻き込まれたからには、話さないといけまい。そう覚悟して、湖に行く。

ミリスは予想通り目覚めていた。だが、その姿は万全とは程遠く、疲労しているのが遠目からでもわかった。

心が疲れていた。

吐く息はため息。とても弱い呼吸は、魂までも吐き出してしまいうだった。

「目覚めたか」

振り向いた顔は希望などない。あるのは絶望だけ。

「ノアさん」

堰が決壊したように涙が溢れる。

「う、あああ」

ミリスは私に近づき、抱きついてきた。服が湿る。そんなミリスを左手で抱き、右手を頭に乗せる。

何も心配しなくていい。

全ての業は私が背負おう。

泥だらけになるのが関係ない。この娘は私が大切に護ってやらねば。抱きしめた体は、細く、小さく、弱かった。

「ど、どうも」

泣いて落ち着いたのか、顔を赤くして私から離れた。太陽が傾きかけている。そろそろ帰るとするか。

森に向かって歩く。とぼとぼと、ミスは付いてくる。

バサバサバサ

木の間から鳥の姿が見える。黒く大きな鳥だ。

!?!、何だ、敵か!?!。

呆然と見上げる私の後ろから突然衝撃が来た。一度ははずした指輪を付け直し、急ぎ後を振り返る。

・・・いや、違うか。

背中から震えが伝わってくる。止めた歩みをまた再開する。

ちよつとだけ掴まれた服が彼女の性格を現していた。

その格好のまま森を抜ける。何もなく、誰もいない。だがその手は離されることは無かった。

「ど、どうしたんですか」

宿に戻るなり、そのような声上がる。それも仕方の無いこと。

ミリスは体の半分が泥にまみれ、その瞳には力が無い。

私にいたっては、全身泥まみれ。服はボロボロ。傷ついてない所を探すほうが難しい。血にまみれ、手には着けていなかった指輪。

怪しまれないという方がどうかしてる。

「と、とりあえず、お風呂に入ったらどうですか」

おどおどしながらも入浴を勧められた。ふむ、そうしようか

「そうだな、そうしよう」
「ではお嬢さんはこちらへ」

ミスは女性の従業員に連れられて扉の奥へと消えていった。私も見送ってから部屋へ向かった。

降り注ぐ水が頭の中を冷静にする。

今日のことは間違いなく心に傷をつけた。私といると危険だとはっきりわかっただろう。
分かれても奴らが狙わないとは限らない。どうするべきか。

頭から湯気を出す勢いで考える。

・・・だめだ。何も思いつかない。

会ってどのような話をしていいかも分からない。

「」
「」
「」

ミリスの事が気になり、廊下へ歩き出した。何を話して良いか分からないが、とりあえず会おう。
まずはそれからだ。

と、思っていたときばったり会った。

「体調はどうだ」

「あ、もう治りました」

「そうか、それはよかった」

考えておいた計画が台無しだ。思わず顔を逸らしてしまう。

「……………」

沈黙が痛い。何か話さなくては、

「ノア」「ミリ」……………」

くそ、なんでこんなに間が悪いんだ。いつもなら豹のごとく回転の早い頭も、亀のように遅い。

「け、怪我は大丈夫ですか？」

少し困りながらも心配してくれる彼女の心づかいがありがたい。

「ああ、もう治っている」

「治っている!？」

しまった。普通あの怪我がこんなに早く治るはずがない。やはり私は動揺しているのか!？

「話は部屋でしよう」

これ以上ボロが出ないという保障はない。私は逃げるように部屋に

戻っていった。

「と、いうわけだ」

ミリスに気絶した後の経緯を話す。もちろん死体の処分方法は隠した。

「なにが『と、いうわけだ』ですか」

私の仕草を付けて話すミリス。他人から見ると私はこう見えるのか。

「まずはあの武器。あれはなんなんですか」

ぐ、いきなり言いにくいことを。何て答えればいいのか考える。考えるんだ！

「………」

「無言ですか、まあいいでしょう」

くそ、何も思い浮かばない。納得してくれたのならそれでよしとしよう。

「ではつぎ。あの瘴気はなんなんですか」

ぐ、これはきつい。話したくないから隠していたのだが、核心に触れないように話せない。

「……………」

「まあ、ここまでではいいでしょう」

「では、最後。これには絶対答えてください」

きた。最後の質問はわかる。最も重要で、大事なこと。

「あの人たちはだれですか」

分かるだけで答えられない。汗が流れていくのが分かる。

「それ以上は……………」

「それ以上は？」

「それ以上は聞くな。もう元に戻れなくなる」

何一つ答えられない。何一つ話せないから。

何一つ答えられない。何一つ聞かせられないから。

私の抱え込んでいる闇は、この子には重すぎる。たとえ抱え込めたとしても、その重さ故に動けないだろう。それは羽を奪われた鳥。空に戻れない鳥は、仲間がいない世界で生き続けなくてはならない。

あの思いをさせる訳にはいかない。

あれは私一人で充分だ。

side ミリス

降り注ぐ水が頭の中を冷静にする。

何であんなことしちゃったんだろう。

抱きついて泣いて、相手が抱きしめてくれて。背中に寄り添って服を摘まんで。

それはまるで、

「・・・恋人・・・ボツ（顔が赤くなる音）」

暖かいお湯がさらに顔を赤くするのを手伝う。頭を振りながら、悶々とする。

あんな良い人と恋人なら、確かにいいけど・・・

どんな顔して会っていいかわからないよー！

「！」「」

従業員の人に彼が何処に入ったかを聞いた。

いつも以上に身だしなみを整える。髪は潤いを取り戻し、服は可愛いのを借りた。
上は赤地に黄色のワンポイント、下は黒と赤のチェックのスカートを履いている。

どきどきと鳴る心臓を押さえ、私は部屋へと歩き出した。だけど、その歩みは止まる。

廊下の角を曲がった所に彼はいた。

「怪我は大丈夫ですか」

「ああ、問題ない」

計画はガラガラと音をたてて崩れ去った。

どうしようどうしようどうしよう。

思わず顔を逸らしてしまう。沈黙が痛い。彼は寡黙な人だ。ならここは私が！

「ノア」「ミリ」……

なんでこんな時だけ話すのよー！

「け、怪我は大丈夫ですか？」

今度は成功。彼が少しだけ微笑む。

「ああ、もう治っている」

「治っている!?!」

驚いた。だって剣が体を貫通してたんだよ。しまった、という表情をしている。

「話は部屋でしょう」

彼は早口で言い部屋に戻ってしまう。

あ、やっぱりしまったって思ったんだ。

「と、いうわけだ」

気絶した後の出来事を話される。墓を作っていたから森にいた、そう話した。だけどそんなことを聞きたい訳ではない。

「なにが『と、いうわけだ』ですか」

彼の言葉は、私の聞きたいことを一言も発しなかった。どうせ何も言わないつもりだろう。なら、こっちから聞いてやる！

「まずはあの武器。あれはなんなんですか」

銀色の綺麗な弓。瘴気を纏っている漆黒の剣。

異なった二つの武器はある一つの言葉が共通している。

『収束』

剣は指輪から、弓はロザリオから現れた。おそらく、いや絶対彼は何か知っているはずだ。

「……………」

「無言ですか、まあいいでしょう」

知っていることも話さないことも分かっている。短い付き合いながらも彼の性格は大体分かっているつもりだ。

「ではつぎ。あの瘴気はなんなんですか」

村で見たときも瘴気が出ていた。

あれは、”怨念が具現化した”とありえない理由で自分の心を無理やり納得させた。

だけどそれも限界。ちょうど良い機会だし聞きださないと！

「……………」

「まあ、ここまではいいでしょう」

「では、最後。これには絶対答えてください」

うん、やっぱり言わない。

最悪ここまでは良い。だけど最後の質問だけはどうしても答えてもらいたい。

「あの人たちはだれですか」

怪我をした。命を狙われた。あれだけやられれば、冗談では無いと誰でもわかる。

だから、これだけ。他はいいからこれだけは答えて欲しい。

「それ以上は・・・」

ようやく彼が重い口を開いた。

「それ以上は？」

「それ以上は聞くな。もう元に戻れなくなる」

願望ではなく命令。推定ではなく断定。蠟燭に虫が飛び込んだ。虫は焼かれ地に落ちる。

揺らめいた炎に照らし出される彼は、どこか儂く、どこか寂しい。

抱きついた体は、まるでこのまま消えてしまうかのように、とても小さく見える。

呆然とその場に立ち尽くす。

湯冷めなのか、体中の体温が低くなっていった

↑10 気持ち（後書き）

果てしなく遅い人物紹介VER2

ミス・ベルスト

肩ぐらいまでの茶髪に、同じく茶色の瞳

身長、155ぐらい

体重、秘密

スリーサイズ

胸：わずかに

腰：くびれはある

尻：小さい

年：14

主な武器 弓

超アバウトな人物像。

作者は物語の80%を妄想で書いています。

『11 ランク(前書き)』

今回は短いです。

「いいか、まず指輪に魔力を込める」

そういうと指輪にちょこんとある蒼緑色の宝石が、かすかに光った。おぼろげな光りは遠目からでは見えないだろう。

「そうして先ほど言った言葉を話す。さ、やってみる」

今、私たちは昨日の森の中にいる。

昨日の件があるので、湖に行く気は全く無いけど、森へは魔物を狩りに来た。

私はロザリオに魔力を込めて言葉を発する。

「コンクルド
収束」

昨日の武器については簡単に教えてもらった。

どういう理屈か、なぜ母が持っていたのか、などは聞けなかったけど、武器の出し方・しまい方については聞けた。

ただいま、実践中。

「あ、あれ？」

けれどロザリオは全くといっていいほど光らない。依然、沈黙を貫いたままだ。さっきからずっとこう。なにがいけないんだろう。

「魔力の問題だな。魔力が少なすぎるため、反応しないんだろう」
冷静に分析する彼。

『収束』

ミリスは銀色の弓を取りだした。
魔物が現れた！

たたかう
ぼうぎょ
どうぐ
にげる

ミリスは矢を放った。矢は魔物にあたった。
魔物を倒した。

理想論者ではないけど、こうなったらいいなあー、と思っていた。

理想は、サアー、と、風に流された。

「魔法を本格的に習ってみるか？」
「そうしましょう、そうしましょう」

理想を現実に変える好機。これを逃すわけにはいけない。こくこくと首を振って彼に賛同する。そんな私の姿を見て、彼は微笑み、

「なら、魔物を狩ってから帰ろう」

太陽は出ているはずなのに薄暗い森を歩く。歩くこと数分、曲がりくねった道の先に彼らはいた。

10匹ぐらいであろう魔物は、誰を襲うわけでもなく、のんびりと生活していた。ウサギによく似ていてかわいかった。

これを殺さなければいけないの

瘴気が漏れているから、魔物だとはわかる。魔物の中にだって人を襲う物もいれば、のんびりすごす魔物だっている。何もしない無抵抗な生き物を殺すのには気がめいる。

あ、まって・・・

ヒュン

ノアさんは気配を殺して近づき、魔物を切った。魔物からは血がでて死んで、

・・・え？

タタタッ

ガサガサガサ

魔物たちは逃げ出した。一匹も欠けることなく、その姿を森の奥深くに消した。あたりの草が剣風で一息遅れて煽られる。

確かに剣を振り下ろしたはずじゃ・・・

「さて行くか」

そういう彼の左手には魔物のしっぽ。瘴気はかすかだが漏れている。

「魔物を倒した証があればいいのだろうか？」

自信満々、嫣然一笑な顔はとても優しく、とても心が魅かれた。

「たしかに受理致しました」

「じゃあ」

「はい、後一回魔物を討伐すればFになれます」

そうだった。一回じゃダメなんだ。もう一匹切ってくれば楽だったの。

「もう一体は、別の魔物を狩って来て下さい」

同じ魔物じゃダメらしい。あれ？この人も私の心が読めるの？

「この付近で魔法を学べる場所は無いか？」

「それなら、ここを出て左に行くと言魔法学院がありますよ。小さいですが基本だけなら充分だと思います」

「ありがとうございます」

「それと、魔物を狩るなら何かついでに依頼を受けるといいですよ」

そんな声を背後に聞いて、掲示板に向かった。
様々な依頼がある。護衛任務、薬草摘み、魔物討伐、浮気の調査。

最後の以外はどれもまともなものだ。

ランクがランクだから依頼が少なく、見合った依頼を探すのも一苦
労だ。

あ、これは……。おいしい！場所が反対だ。

「これなんかどうだ」

そう言って差し出されたのは、

《薬草摘み、報酬・鉄貨7枚》

相場はわからないけど何もしないよりかはいいと思う。

「これにしましょう」

受付の人に紙を出し、受理された。

「金貨2枚になります」

そう返事がきた。今、推薦された魔法学院の前にいる。入学、とまではないかないけど、「魔法を教えてください」と言ったらこう言われた。

ただいまの手持ち

白金貨6枚、銀貨9枚、銅貨7枚、鉄貨が少々。

この町の宿屋は一泊銅貨4枚なので、計銅貨8枚使った。

金貨一枚分にも届かない。私に魔法はあきらめろというのか。

「お帰りを」

そう言われて、踵を返し去っていく。ばたんと閉められた扉は、一筋の光も漏らさなかった。

「仕方が無いか」

なお、彼に教えてくれと聞いたら「私は魔法が使えない」だ、そう
だ。

三度目の森。彼は昨日の敵が持っていた剣を握っている。投擲用ではなく、短い剣”ダガーナイフ”の感覚だと、彼は言う。

「魔物だな」

「魔物ですね」

足元に寄り添うようにいるのは犬。狼の子供にも見えるがその動作は犬そのもの。

か、かわいい。

「リンドウルフ、中型の狼で、証は牙か毛皮・・・か」

証明の証。だいたいそれは”使えるもの”が選ばれる。

要らない物を持ってこられても処分に困るからなんだけど・・・

「大切ですよね・・・」

魔物とはいえ、こんな子供からはとれない。泣く泣く諦めることにしよう。そう思ったからこそ、彼も言い難かったんだろう。

「どうやら見逃してくれないらしいな」

返ってきた答えは、彼にしては珍しうが外れていた。

ガルウウ

一匹の狼。足元の子供が、ママ、と言いそうな雰囲気で駆け出していった。

彼は”剣”を構える。私も弓を構える。少しでも動いたら来る！

グアアアア！！

きた！？なんで動いてないのに。私は矢を放つ。だけど矢はあさつての方向に飛んでいった。

狼は彼に噛み付こうとした。唾液塗れの牙が見える。だけど彼は脅えるどころか、逆に一歩踏み出してその剣を顔に撃つ。

！、グルウウ

まだ睨む。犬歯を折られても、闘う意志は折れてない。続く威嚇。緊迫した空気。

立っているだけで息が苦しくなる。やがて、狼は立ち去っていった。

「っ、つかれたー」

思わず、その場に座り込んでしまう。ノアさんは折れた牙を拾った。

「魔物は脅えに敏感だ。対峙しても脅えるな」

そんな彼の説教など耳にはいってこない。

あとは薬草摘みか。木の葉の間から空を見てそう思った。

「ではカードをお貸しください」

ギルドに戻ってきた。もうすぐ昼食だが、荷物が嵩張るのでこちらを優先した。

「はい、できあがりでした」

すぐに返ってきた。文字がGからFに変わっている。何もやっていないけど、やはり嬉しい。しばらくの間カードを見つめていた。

ギルドを出て町を歩く。辺りは昼食の準備なのか、買い物袋を持つ人の姿で一杯だ。

「さて、これを届けに行くか」

彼の持っているのは、依頼された薬草。確かに、持っているのは邪魔にちがいない。

「住所は、と……」

依頼書を見て、届け先を確認する。

「シーヘッド町、ミュンエ通り、X - B A N - T I」

見てもどこかわからない。こんな時頼りになるのは……

「また来てくれたのかい」

「ええ、まあ」

あのおばちゃん。おばちゃんから果物を二つ買う。紙を見せると、陽気な顔がひきしまった。

「ここに行くのはやめときな」

そう言っておばちゃんは商売に戻るうとする。

「なんでですか」

「悪い噂でいっぱいだからだよ。聞くところによると、館に入った人間は二度と帰ってこれないとか
丑三つ時に悲鳴が突然聞こえるときか」

別名、魔女の館。思わず背筋が凍る。怪談は嫌いだ。

「場所だけでいい。教えてくれないか」

そういうと、紙とペンをとりだし、サラサラと書く。

「おおまかな場所だよ。迷ったらその辺の人に聞きな」

今度こそ商売へと戻ってしまった。

ありがとう、心の中でそう思い、私たちは書かれている場所へと向かった。

「ここですね」

《この角を曲がってすぐに目に付いた建物》

最初は悪戯かと思った。だけど、実際はそれだけでわかる。そびえたつ建物はまるで魔女の城。黒く、手入れのされていない館は、不気味な雰囲気をかもし出していた。

蔦が生い茂る錆びた門を開け、私たちは乗り込んだ

『11 ランク（後書き）』

本当ならこの倍はあった今回のお話。

説明文が長すぎるので、削っていったらこんなスリムになった。

虚しい。

トントン

玄関に音が響く。草が絡みつく門を開け、その先にある扉を叩いた。小さな音なのにやけに響く。返事は無い。耳を澄ましてみるけど、部屋の中は物音一つしない。

「あきませんね」

悪いとは思いながらも、錆びたドアノブに手を伸ばした。

ギィィィ

開いてしまった。力を入れることなくドアはその重みで開いた。

「んっ！」

思わず鼻をつまみ、口を塞ぐ。

異臭

それが家の中から漂ってくる。鼻を刺激する臭いは、侵入者を拒む壁^壁。

これほどまでにマスクが欲しいと思ったことはない。

家の中には物が散乱している。埃が被っている物もちらほらある。

足の踏み場も無い。物を壊さないようにしながらゆっくりと奥に見えるドアを目指して歩く。

ギィイ

ドアを開けると同じ光景だった。少なくとも私にはそう見えた。ドアを開けてできた風が埃を舞い散らせる。

「音が聞こえる」

そう一言彼は言う。床に両膝を付いて、床においてある物をどかし始めた。呆然と彼を見ていると、彼は私のほうを見ずに手招いている。

こちらにこい、と言ってるのかな？

「見ろ、扉だ」

床の木目と同じ模様の扉。かすかだけど音が聞こえる。

だけどおかしいことが一つ。

この扉には取っ手が無い。

爪ぐらいしか入らないわずかな隙間で開けると？

彼は丁寧に埃を払っている。

「あつた」

そういうと彼は小さい木を床から取り外した。その下には取っ手がある。その取っ手に手を掛け床を開ける。サラサラと塵が流れていく。

下に見えるは闇。黒い梯子が闇の中に飲み込まれている。

「一緒に行くか？」

そう言われてぶんぶんと首を振る。

怖すぎて入っていけないか！

彼は手足を梯子に乗せ、カンカンと音をたてながら闇に消えていく。一人ポツンと残された私。周りには不気味なものがたくさんあり、太陽の光が空気中の埃を照らす。

……あれ？こっちの方が怖い。

ガタッ

！？思わずそちらを振り向く。誰もいない。音が聞こえなくなる。風が、ビュウ、と鳴る。水が、ピチャン、と落ちる音が聞こえる。アハハハハ、と子供たちの笑い声が聞こえる。

さっきまで気にもしなかった音が耳に入ってきた。

ごくつ。唾を飲み込む音さえもはっきりと聞こえた。梯子を掴み、足を掛け、ゆっくりと降りていった。底が見えない真っ暗な闇を降りる。

どこまで続くんだらう。降りても降りても終わりが来ない。と、やっと薄暗い光が見えた。

「ここは・・・」

扉を開けるとそこは本の山だった。書斎なのだらうか立派な机まである。

それらを横目で見て、すぐに次のドアを開ける。一人でいたくなかった。はやく誰かに会いたい。

ドアを開けると、そこにいたのは彼ではない。

一人の女性が横たわっていた。

「大丈夫ですか！」

思わず駆け寄ってしまった。私たちは不審者にしか思われぬのに。

「お・・・」

「お？」

「お、おなか減った・・・」

そう言っって彼女は倒れてしまった。

「いやー、助かったわ。ありがとう」

私たちは買ってきた果物を彼女にあげた。ちなみにノアさんは逃げ道の確保をしていたらしい。

広間。部屋の中央には茶色の坪があり、ぐつぐつと沸騰している。周りは研究に使うものなのか、試験管など様々なものが置いてある。

「依頼された物を持ってきた」

ノアさんは薬草を差し出す。

彼女は、おー、と手をポンとうち

「あー、忘れてた」

彼女は椅子から立ち、別の部屋に戻っていった。開けっ放しの扉からガサゴソと何かを探す音。

「いくらだったっけ？」

「鉄貨七枚です」

「あはは、そんな額で引き受けてくれたんだ」

と、彼女は笑って

「お釣りはいらさないわ」

銅貨一枚を渡してくれた。渡された銅貨は軽かったけど、重かった。

初めて自分たちだけで働いた報酬。

「ここでなにをしているのだ」

「魔法の研究をしているの。ここは地下深くだから環境の変化があまり無いしね。だけど研究に没頭して今のようになることもあるけど」

え、じゃあ

「魔法が使えますか？」

「一応一通りはね」

神様は私を見捨ててはいなかった。最後の好機。これを逃がせば後はない。

「教えてくだ『ぐうー』さ・・・」

「まずは飯を食べてからだね(な)」「」

「長いな」

「女の風呂は長いんですよ」

玄關の外で私たちは待っていた。家の中より外のほうが清潔なため。彼女は風呂に入ってくると言った。

「またしたね。・・・なによ、そんな目で見て」

風呂に入った彼女は見違えるほど綺麗だった。

ふけがたくさんあつた髪は、潤いを取り戻し、銀色が輝く。風が吹くとサラサラと髪の本一本まで見えた。一重の紅い目は、まるで宝石を埋め込んでいるようで、鼻はすっきりとしていた。

「それじゃいきましようか」

そう言つて彼女は歩き始める。彼女お気に入りのお店があるらしいと、そうだ。

「あ、あの・・・」

「ん、なに？」

「私は、ミリス・ベルスト、と言います」

「リオ。リオ・キャンゼフ。それがアタシの名前よ」

「ノア・エミリという」

「さ、ついたよ。話はここでしましょう」

目の前にあるのは、古びた飲食店。隠れた名店と呼ばれるような感じの店だった。

カランコロンと音を立てて入る。店の中は木で作られた椅子とテーブルがあった。

「ひさしぶりだね、マスター」

「元気にしてたかい」

「ええ、もちろんよ。」いつもの”を三つお願い”

という店員さんは調理を始めた。香ばしいにおいがする。

「キャンゼフさん」

「リオでいいよ。で、なに？」

「あそこで何をしているんですか」

「主に魔法の研究かな？道具とか」

腰につけていた鞆から小さい宝石を取り出した。

「これが”人工妖精”さ」

「人工妖精？」

「なんだ、それも知らないの」

と、リオさんは少し考えて

「妖精、または自然妖精って分かる？」

「いえ、わかりません」

「ほんとに基本からなんだねえ」

と机に、べたー、と俯いた。子供のようなその行動はかわいらしい。

「おまたせ」

と店員さんが料理を持ってきた。すごくおいしそうだ。色とりどりの野菜やお肉がこれでもかという風に皿に載せられている。

「いただきます」

リオさんはおいしそうにほうばる。小さい口一杯にほうばる姿は、

やっぱり子供らしい。

ノアさんは落ち着いて、一口だけ食べて

ボタン……

顔ごと料理にくっつけて何も使わず食べようとしている。

いやいやいや。それはだめでしょう。

心で思っていたことを全力で否定しようと努力する。

ガタガタガタガタ

小刻みに震えている。顔を上げて、目で睨まれた。
食べるな、危険！と目が叫んでいる。

「食べないの？」

「いや、いまお腹『ぐうう』……」

退路遮断。くそ、逃げ場が無い。

リオさんが不安げな感じで見てくる。そんな悲しそうな目で見ないで。

でも、彼の命を無駄にするわけにはいかない！（注：死んでいませ
ん）

料理をすくうと、本当においしそうに見える。

ためしに一口だけ食べてみる。

・・・ゴブ

「だ、大丈夫？」

「す、少しむせただけです」

やばい、たべられたもんじゃない。だれか、だれか助けて・・・

「ミリス、すまないが私に出来ないか」

復活。彼は天使であり勇者だった。私に救いの手を差し伸べた勇者

(天使)は

ガツガツガツガツ・・・バタン

食べた後すぐに眠った。

「マスター、後一品おねがい」

だけど、誰も救えなかった。ノアさん、三途の川で会いましょう。

「そんなに疲れてたんだねえ」

館に戻って椅子に座ってぐったりしている。体がまだわずかに震えている。彼も同様だ。

「じゃあ魔法について説明しましょうか」

と一冊の本を取り出した。

「まず基本的な魔法として火・土・水・風・雷。更に上位に光と闇があるわ。」

魔法を使うには”妖精”の存在が必要不可欠なの」

「妖精？」

「魔法は私たちが生み出す物じゃないの。私たちは魔力を生み出す。それを妖精に与えて、妖精が魔法を使う」

「魔力さえあればどんな魔法も使えるんですか？」

「だいたいはそのよ。基本的な魔法は得手不得手を考えなければ大体使えるわ」

ここまでは分かった？とリオさんが尋ねてくる。

わかりました、と返した。ノアさんは無言で頷いている。

「妖精についてだけど、妖精はどこにでも居るといふ訳ではないの。その好みの場所に多くいるわ。火の妖精なら火の近くというようにね。逆に嫌いな所には少ないわ。」

居ない所には一匹もない。

妖精はその場所から生まれるの。水があれば水の妖精が、電気があ

れば雷の妖精が生まれるわ。」

ウーウー

と、そこで何かの警報音が鳴った。リオさんは立ち上がり、機械で何かを見ている。

「何を見ているのだ」

「侵入者がいないか確認しているの」

「ここには電気があるのか？」

「いいえ、私がつっているの」

電気は貴重だ。”城下町”ぐらいしか普通の家にも提供されない。

”町”ではよほど高い位の家にしかない。

電気を大量に作るというのは、それだけ魔力を使うということ。上級の人しか頼めない。毎日の事なので、払う報酬が高いと経営が悪化するし、低いとそもそも働いてくれない。よって”町”での電気の一般化は無理らしい。

「3人・・・いや4人ね」

「何者だ」

「私の事が邪魔な連中よ。話は後よ、とりあえず撃退してくるから」

「私も行くぞ」

「あら、ありがと」

「わ、わたしも」

そういうと彼女はクスクスと笑い、

「じゃあ、皆でいきましょるか」

「魔法はイメージが大事。より強くイメージした方が妖精に伝わりやすく、分散しにくいの」

「リオさん」

「ん、なに？」

「なんでこんなところで話すんですか」

一階の広間の手前。広間の中には、普通の格好の人がいる。だけどその行動は普通ではない。空き巣ならまだ良い。金目の物に目もくれず、明らかに何か目的のものを探していた。

それはおそらく、

「私を探しているんでしょうね」

「奴らは？」

「この国の敵国だと思いわ。どこかからか私の事を嗅ぎ付けてきたようね。じゃあ、魔法の使い方を教えるわね」

え、ここで？

「基本的には魔法は、その場所にあつた魔法を使った方が強いわ。こんなふうに」

突如手からバチバチと電気が流れていく。手を振ると目で追える速度で、半月の形をした刃が相手に飛んでいく。

「グワアア」

「なんだ!？」

「いたか!？」

雷の刃は、一人の男の方を貫いた。残る三人も反応する。

「と、いうわけよ」

「前を向いてください!」

いかにも、余裕、という風にこちらを向く。当然相手の方を見ていないわけで……

「来てます!来てます!」

一人が切りかかってきた。リオさんが邪魔で矢が放てない。と、リオさんは手のひらだけ相手に向けて

ビュウウー　　グオオオー

かざされた手から突風が巻き起こる。物が吹き飛び、いくつかの物が相手に当たる。足元の物は綺麗になり、逆に反対側の壁は新たにゴミを増やした。

「こんな感じかな」

当り前、という風を感じられるその態度は、すごい魔法使いだと認識させられた。

ノアさんはただただ感心していた。

↑12 魔女（後書き）

戦闘描写もですけど、日常のほのぼのした空気がうまく書ける様になりたい。

f a t e だけじゃなくバカテスの短編も書こうかな？

¶ 13 Gの恐怖(前書き)

エラーで一回消滅orz

13 Gの恐怖

「よいしょっと、四人も運ぶと疲れるわ」

リオさんは、クスクスと笑っている。

あの後、気絶している男たちを殺しはせず、裏の海に捨てた。運がよければ生き残れる、運がよければ・・・

「さて、どこまで話したっけ？」

「妖精は生まれるという所までです」

「じゃあ、続きね。妖精は、放った魔法からでも生まれるわ。より強い魔法を放つにはより多い妖精が必要な。だから魔法使いの戦いは、妖精の数を増やす事から始まるの。」

「弱い魔法であの強さなんですか？」

「さっきも言ったとおり、妖精は自然からも生まれるわ。さっきのは雷と風。どちらもここにはたくさんあるわ」

要するに、弱くは無い、ということらしい。

「ならば雷などは使えないのでは？」

「そう・・・ですね」

雷は自然にあるけど、それはたまに来る雷雨の時に起きるだけ。

つまり、電気の供給がある”城下町”ぐらいでしかその力を発揮できない。

「だから、人工妖精が作られたの。これはね、妖精を人工的に”創る”の。使い捨てだし、普通の妖精よりも効果は低いけど、魔法は放てるから。主に、火・雷の魔法に用いられるわ。」

蛇足だけど、人工妖精が創られたことによって、自然にいた妖精と区別するために、自然妖精、って言葉がつくられたんだって

「ならば最後、風の妖精は空気があれば生まれるのか？」

「ええ、そうよ」

「ならば、最初から強い魔法が放て、最強、ということにはならないのか」

「最初は、ね」

「どっという意味だ」

「風の妖精は”空気を好む”。だから一つの場所に集中しにくいんだよ。だから密閉空間とかじゃないと強い魔法は放ちにくいんだよ。だけど風の魔法は攻撃範囲が他の魔法よりも広いから、そんな場所だとせつかくの長所を殺すわ」

勝手に最後にされたが、私にはもうひとつに聞きたいことがある。最も重要で、最も大切なこと。私の今後の人生を左右するとても大事なこと。

「リオさん」

「ん、なに？」

「魔法を使えると、容姿が良くなるんですか？」

リオさんしかりテトラさんしかり、今まで見た女の魔術師は、全員胸が大きく、顔も体も憧れるほど綺麗だ。私のコンプレックスを解消できるかもしれない。

「いや、そんなことはないですよ」

「そうなんですか・・・」

「でも雷の魔法を応用すれば・・・」

「どつやるんですか!?!」

将来、男共を惑まとわせる魔性の女になれるかもしれない。限界まで身
を乗り出し、全体重を机にかける。たとえ机が壊れようが関係ない。

「電気で、細胞を刺激すればいいんだけど」

「どっ」

「そんなことができるようになる頃にはお婆ちゃんになってる
わね」

希望は金槌かなづちで遙か彼方に飛んでいった。

「ど、どうしたの!?!」

「あー、気にしないでくれ。彼女の持病だ」

「そ、そうなの。お大事に」

はい、お大事に。

「じゃあ、さっそく始めましょうか」

気持ちをゆっくり切り替える。魔術が使えるようになって、少しで
も強くなりたい。

足手まといを早く卒業したい。それにしても胸を大きくできないの
か。

「じゃあ、エミリ」

「ノアでいい」

「ノア、晩飯の材料買ってきて、そして作って」
「了解した」

文句一つ出さずに、彼は外に出て行った。リオさんって見かけによらず、人使いが荒いな。

彼はドアを開け、玄関のほうに向かった。残された私はリオさんのほうを向く。

「じゃあまず始めに・・・覚えたいものはある？」

「なんでもいいです」

「じゃあ、簡単な風から」

と私の後ろに立って、手を握る。

またチクチクとした感じがして、左手が熱くなる。どうもこの感じに慣れることができない。

「さ、風が出ると思ってみて」

前回は時間が掛かったので、最初から強く、正確にイメージする。瞬間、部屋の空気が循環し、私の後ろから風が吹いてきた。

「いいじゃない」

と、今回はすぐに成功した。私の指先から出た風は、空気を震わせ、少し埃が舞うのはご愛嬌だ。

「言い忘れてたけど、この館には特別な香りが充満しててね、妖精が多くいるわ。外にでたら、もう少し強くしないとだめよ」

「はい、わかりました」

この臭いは、その香りなんだ。この臭いにも何とか慣れたが、それはそれで嫌だ。

じゃあ次、と、水を持ってきた。バケツの中の水は、たぶたぶ、と

揺れ私の前に置かれた。

「じゃあ、今度は水を出してみて」

「えいつ」

と、同じようにイメージをしたけど指先から水は出ない。あれ、なんで？

ドシャアアア（頭の上から滝のように水が流れる音）

水も滴るいい女誕生。いきなりの事で悲鳴も何もでない。壊れた機械のようにギギギと首を後ろ振り向く。そこにはバツが悪そうな顔をしたリオさんがいる。

「言い忘れてたけど、魔力が足らないと発動しないわ。魔法が出るイメージが足りないと頭の上から出るの」

考えるのは脳だから、と、付け加える。

そういうことは早く言って欲しい。顔にある水滴を軽く拭き、びしょ濡れになった服に手をかける。びたっ、と体に張り付く服は重く、とても脱ぎにくい。

っと、脱げた。

「すまない、嫌いな物はあるか」

お邪魔虫登場。

さて、ここで状況を整理しよう。

買い物カゴを持っているノアさん。
あちゃー、と、いう顔をしているリオさん。

上は下着姿で、その下着さえも濡れて張り付いている私。

「水の精よ、覗き魔に人罰を」

イメージする。指先からほとばしる水は弾丸。その弾丸は、回転しながら、彼の目へ、その硬度を保ちながら一直線に

「シ・ネ」

ガンガンガン

放たれた弾丸は、彼に当たることなく、後ろの壁を抉り取った。放たれた部分のみが傷つき、周りにはヒビ一つない。

覗き魔は初撃が来る前に逃げた

「すごいじゃない」

すごいというのはあの覗き魔を殺せるぐらいになってからだ。まだまだ精進が足りない。

「いまみたいに、イメージが強ければ強いほど少ない魔力で大きな力を使えるわ」

「ソウデスカ」

「れ、練習するなら魔力をすぐに出せる練習をしたほうがいいわ」

「ドウシタライインデスカ」

「ごめんなさい。その顔をやめて下さい」

リオさんは土下座している。何がそんなに怖いんだろう。そんなことを思いながら、ゴペアと息を吐き出す。

「練習方法としては、魔力を0 100 0と繰り返すことかな。100はその時できる100でいいから」

「魔力つて増やせるんですか」

「ある程度はね、それ以上は才能が必要になるわ。方法としては魔力を使っていれば自然と増えていくわ」

と、教えられたところで覗き魔が帰ってきた。ってあまりにも早すぎないか？しかし、買い物袋には見たことのない野菜がいくつがある。

・・・そっか、さっきはもう材料を買ってきていて、料理を作ろうとしたから好き嫌いを聞いたのか。

ちょうどお腹も減り始めてきた。

「台所はどっちだ」

「そうね、一旦終わりにして、ご飯にしましょう」

一通りの練習を終えて、台所に向かう。

このときは少しも思わなかった。あんなことになるなんて・・・

「なんですかこれ」

服を着替え、台所の扉を開けた。

あはははは、と、リオさんは笑っている。

台所は悪魔の巣窟と化していた。いたるところにカビが生え、黒い悪魔がうじゃうじゃといる。

と、リオさんは嫌な笑みを浮かべ、こちらを見てくる。

なぜだろう嫌な予感しかしない。

「ミリス、魔法の練習よ。飛んでいる悪魔を殲滅しなさい」
「え!?!」

驚きの提案。しかし、ひとつだけ疑問がある。

”飛んでいる”悪魔

悪魔は床をカサカサと移動している。ってまさか

「じゃ、がんばってね」

「うお!?!」

ノアさんは引っ張られてドアの向こうに行った。

ドアはボタンと閉められた。そう”ボタン”と大きな音を立てて

ブウン ブウン

「いやあああああああああああああ」

黒い悪魔来襲。

無限というのはどのくらいの数で無限なんだろう。

一億？一兆？一京？一垓？一予？

数えられないなら、どんな数字でも無限なんじゃないだろうか。

そう、それが例え部屋一杯にいる悪魔の数でも・・・

「いやだー！」

必死に応戦する。幸い水気がある。イメージする。手のひらから放たれる水は、悪魔を全て壁に叩きつける。

グシャアア・・・ ブウン

死なないことは分かっている。奴らの生命力がうざいくらい高いことは、古今東西、老若男女誰でも知っている。だから更にイメージする。五指全てから、放つ水は悪魔を全て貫通する。

ダンダンダンダン

やった、無限の数から五匹減らした。頭を打ちぬかれた悪魔は、その活動を停止

ブウン

することはなかった。

なんで!?

「ミリス、奴らは脳が頭と腹にあるから頭を潰しても無駄だぞ。まあ、頭が無ければ食えることが出来ないから餓死はするかな」

ありがとう、天の声。

ドアの外から天の声が聞こえる。二人ともまだ外にいるはずだ。天の声一人だけなら私を助けてくれるはずだから。

カサカサと床が黒くなっていく。必死に足から水が出るイメージをする。

ドシャアアア

「きゃ!?!」

「どうした!?!」

「水が頭から落ちてきたんです」

「多分だけど、イメージが固まりきらなかったんじゃないの?」

ずっとイメージしろ、と、ドアの外の監守が言う。そうしている間にも、黒い悪魔は何匹も接近してくる。時には体ごと避けられないといけないことができた。

何匹も何匹も攻撃しても動き続ける。体力よりも先に気力が尽きてしまう。その時、髪から落ちる雫が目に入った。

水

周りは水浸し。黒い悪魔はチャパチャパと、音を立てて動いている。その時私にはあるひとつの事が思い浮かんだ。

『どちらにもここにはたくさんあるわ』

それは諸刃の剣。相手も自分も被害を被る。

ブウウウウン

考えている暇は無い。その間にも黒い悪魔は進軍する。

イメージする。指先からほとばしるは稲妻。

ただイメージする。殲滅の形。

「んっ！」

水は電気を通す。そんなのはわかる。だから衝撃に備えた。だけど、危険を察したのか、数匹飛翔した。急遽きんすう私は狙いを変え、飛来する悪魔を目掛けて稲妻を放つ。

ビリビリリリ

だけど、感電したのは一匹だけ。稲妻は、一番近くにいた悪魔だけを黒焦げにした。幸いにも電気が流れてくることは無かった。だけ
ど……

・・・チツ

閃光が悪魔の目を眩ます。ふらふらと飛んだそのうちの一匹が私の顔をかすった。思わず座り込んだ。水に濡れていた膝が、更に濡れる。

「なんでこんな目に遭わなくちゃいけないの」

だれにも聞こえないような小さい声でポツリとこぼした。目が潤んでくる。

「なんで私がこんな酷い目に・・・」

ふと、ある人物の姿が思い浮かぶ。銀髪で、自分のけつを他人にかせる、諸悪の根源であるあいつの姿が。

体に力が沸いてくる。目に暗き輝きが点る。

イメージする。手のひらからでる水は、濁流。全てを飲み込むその水は、地獄と天国の境目を破壊する！

メキッ

更に強く！もっと強く！！ちようつがいわんきやく蝶番が湾曲し、破壊の兆しが見えてきた。

メキメキ　　ビキッ

「吹き飛ばー！！！！」

バキン、

蝶番ごと境界は破壊された。目の前に見えるのは、諸悪の根源と天の声の人。

やっぱり辛い事は、皆で分かち合わないかね！

ブウウウン 「いーーーーーやーーーー！！！！！」

その日、魔女の館に新たな噂ができた。

《悲鳴は丑三つ時でなくとも聞こえる》

↑ 13 Gの恐怖（後書き）

短編を書くのが楽しいです

ただいまの短編、

f a t e 3

バカテス 1

¶ 14 恐怖からの覚醒（前書き）

いままでで一番長いです。

まあ、ほかの執筆者の普通ぐらいの長さだと思ってください

14 恐怖からの覚醒

太陽は傾き始め、影が伸びる。外で遊んでいた子供たちも、家に帰り、夕食の支度を手伝い始める。だけどとある屋敷の中では、まだ鬼ごっこが続いていた。

「いやー！、くるなー！！」

「喋っていると舌噛みますよ」

「・・・逃げたほうが良い」

三対多数の鬼ごっこ。捕まったら嫁（婿）に行けないという景品が貰える。貰っても、全力で拒否するけど。

「大体あんたがドアを破壊するから」

「魔法初心者なんで仕方ないじゃありませんか」

「『吹き飛ばす』って言ったでしょうー！」

あれ？そうだったっけ。リオさんの話し方が壊れてきている気がする。こっちが素なのかな？

先頭から、ノアさん、リオさん、私の順で走っている。前の二人のおかげで、風の抵抗は受けられないけど（あまり関係ない）それでも、後ろの黒い床が迫ってくるから、もっと速く走って欲しいと思う。

さて皆さん、突然ですが質問です。

とっさに逃げるとしたらどちらに逃げますか？

大体の人が、逃げ道のある方向と答えるでしょう。

じゃあ、皆が同じ方向に逃げていたら？そうです、その方向に逃げますよね？

先頭の人はどうですか？とっさに逃げるとしたら、何処に逃げるでしょう？

「ねえ、どこに向かっているの？」

「すまなかった」

「『すまなかった』じゃないでしょう！…！」

正解、とりあえず敵の反対の方向に逃げる

袋小路。唯一の出口は、黒く侵食された。この部屋唯一の窓は

「無理よお、館の防御は玄関以外完璧だもん」

強力な防御壁によって護られていた。防御壁はめんどくさいので常に働いているみたいだ。原理は不明とのこと。ノアさんが叩いてみるけど、びくともしない。

「こうなったらやるしかないようね」

「そうですね」

リオさんは杖を構えた。構える杖は、色とりどりの宝石が散りばめられている。

「風よ！」

暴風は、悪魔を後退させる。地面にいた悪魔も吹き飛ばす。だけど時間稼ぎにもならない。

ブウウウン

時間稼ぎというのは、時間が欲しい時に必要であり、いまは逃げる時間よりも、逃げられる退路が欲しい。

「火、よ！？」

悪魔の攻撃。リオさんのすぐ左を飛んでいった。それでも考えをそらすことは充分だったように

「熱い熱い熱い」

火はリオさんの頭の上にちょこんと乗った。手をパタパタとやるだけで火は消えて、幸いにも、髪は燃えることは無かった。

「よくもやってくれたわね」

そついうりオさんの目尻には涙が溜まっている。とはいえ、魔法は接近されれば使えない。剣を使うのは論外。じりじりと近寄ってくる悪魔になす術も無い。

このままでは景品お持ち帰りコースに入ってしまう！

「あれ、ちょっとおかしくない？」

そう言われると、悪魔はノアさんの方に集中している。彼は好かれているのか・・・なら彼を生贄にすれば

「それ！それよ！」

と、リオさんは彼が持っている袋を指差している。袋からは野菜や果物が顔をだしている。

これが原因か！

「それを向こうにやって！」

「早く遠くに投げてください・・・」

そこまで言葉に出して私は思い出した。

チルル町に行く途中、彼は一番近くの木に当たった。なんの変哲も無い木の実を木に当たった。

最悪な状況が思い起こされる。なんと少しでも止めなくてはいけない。彼は今にも袋を投げようとしている。

「まっつてー！！！」

願いは届いた。袋は投げられなかった。

ドスン コロコロコロ

袋は投げられなかった。投げたというにはあまりにも距離が無かった。置いたと言っても過言ではない。無慈悲にも食料は私たちの足元に転がってきて

カサカサカサカサ ブウウウウン

行軍速度急上昇。

あ、もうだめだ、彼に責任を持ってもらうしかないや。

アハハハハ、と感情の無い笑いが出る。左の方からも同じ笑いが聞こえる。

ただ足元に近寄ってくる黒い悪魔を見つめる。餌に群がる黒い悪魔。退路は封じられることには変わりはない。

転がっている食料が黒くなる。そんな中、唯一つ黒くない食べ物を見つけた。

あれは・・・ケルン？

私たちを苦しめた緑色の食べ物、黒の床に緑の点をポツポツと描いている。まさか！？

弓を置いてきてしまったことを悔やむ。あれを出すか迷う。そんな間も、餌は無くなりつつあった。

出し惜しみしている場合じゃない！

「収束」

とたんに私の手に銀色の弓が握られる。見惚れる程輝く弓。だけどそんな暇は無い。

放つ矢が無い。ないなら”創る”！。

イメージする。何よりも疾き雷のごとき射を。

矢の基本となる形を創造する。

雷の矢の鏃は細く鋭い。矢羽は三枚。

雷を圧縮し、硬度をあげる。たとえ、物を貫いたとしても、その形は変わることは無い！

「ちよつと、まちなさ」

弓を引く。矢の筈を弦に番え、万感の思いを込めて放つ。狙いは一つ。パンドラの箱を開く！

一筋の光は、木の実を貫く。木の実は弾け果汁を辺りに撒き散らす。箱の中にあつた希望が外にできてくれた。

「いまよー！」

希望の橋が出来た。リオさんが真っ先に飛び出していく。続いて私たちも走り出す。だんだんと道幅が狭まる中、ぎりぎりまで逃げ出した。

「よ、ハア、くも、ハア、やって、ハア、くれたわね」

「な、ハア、んの、ハア、ことですか」

ドアを閉め、肩で息をする。埃っぽいが、思いつきり息を吸い込んだ。部屋が一つ使えなくなったけど、仕方が無い。

「で、これからどうするつもりだ」

「そのまえ、ハア、に」

息を整えたりオさんがこちらを振り向く。

「あの武器はなんなのよ！」

きた。質問されると困るんだけどな。

〈回想〉

「ミリス、今から武器について教えるのだが」

「はい」

「一つだけ約束して欲しい」

そついうと真剣な顔になった。元々真剣な顔だが、引き締まったと
いうのが正しいだろうか？

「あまり人前で見せるのは控えてくれ」

「どうしてですか？」

「どうしてもだ」

～回想終了～

ごめんなさい。あなたの言いつけよりも、私がお嫁に行けなくなる
ほうが怖いです。

「ええと、あの武器はですね・・・」

そこまで言っただけに助けを求めた。何も答えられない。

彼は目も合わせもせず、ただ腕を組んで俯いている。

リオさんは、私と彼を見比べて、

「ノア、何か知ってるでしょ」

確信をついてきた。彼は何も喋らない。リオさんは頬を、ぷくう、
と膨らませる。

「早く答えなさいよ！あの矢は何なのよ！」

リオさんが彼を前後に揺らす。その動作はやはり子供らしく、微笑
ましくなる。

と、ノアさんがいきなり目を見開き、リオさんを見つめる。

「あの矢は君が教えたのではないのか？」

「いいえ、あんなこと教えてもないし、私はできもしないわ」

二人して、首をぐるんとする。

目標変更。二人して詰め寄ってくる。

「「ミリス、説明してくれる？（るか？）」「

だから、何も答えられないって！

「ということは、あれは無意識で起こしたのね」

「そうですよ」

「何がおかしいのだ」

「いい、魔法というのは説明したように、妖精の力を借りるの。形とかは自分で考えられる。例えば、じぶんにとって”龍が強い”と思うのなら、それに比例して魔法も使う魔力が同じでも強くなるわ。

けれど、妖精の力を借りる以上、その性質は変えられないの。水で火を消せるように、魔法で創った”火”も実際にある水で消える。

”風”を高速で飛ばして人を斬ることは出来るけど、”火”を高速で飛ばしても吹き飛ばすだけで精一杯。

本当なら彼女が”雷”で創った矢は、果物を焦がす、か、吹き飛ばす、だけで終わっていた。いくら”雷”を圧縮しても、質量がない物は衝撃だけしか生み出さない。だから、あの時止めようとした。

だけど彼女は、果物を砕いた。雷で砕けるはずのない果物を。これは誰にもできないことだわ。

ついでだけど、魔法で創った物を、実際に使うのも結構難しいのよ」

後で聞いたんだけど、ノアさんは矢を創ったことを驚いていたんだって

「そんなに難しいことだったんですね」

「弓に秘密があるのかしら？もういちど見せてくれないかしら」

ノアさんは頷いてくれた。彼が許してくれるんならいつか。

「収束」

ロザリオは光り、銀色の弓が現れる。紅みを帯びた銀色は、その輝きを失うことは無い。

リオさんは、べたべた弓を触る。

「いい弓ね。握り手をしっかり守っているけど、邪魔じゃない」

「リオさんの持っていた杖ってなんなんですか」

魔法は杖などなくても発動できるのは体験済みだ。

「あれは、イメージを長く保てるよう集中できる宝石や、魔法の力を増幅させられる宝石などがちりばめられているのよ」

そう言いながらも弓を触り続ける。だからだろう、何も言わない彼女に、かねてからの疑問の答えを聞いてみたくなった。

「ロザリオから出てくることについては驚かないんですか？」

「え、この弓本物なの！？」

墓穴。やってしまった。ノアさんは何も言わなくても雰囲気で怒っていることがわかる。

「てつきり、魔法で”創った”かと思ったんだけど……。そういわれたらそうね、質感が本物すぎるわ」

「弓を創ることはできるんですか？」

「さつき矢を創ったように、弓もイメージすれば創ることができわ。で、この弓本物なの？」

「創った弓に能力が付くなんてことあるんですか？」

「普通は無いわ。けどあなたの矢が不思議な現象をしたから、弓に秘密があるんじゃないか、って思っただけ。

で、この弓本物なの？」

話を逸らせない。会話でも向こうが一枚も二枚も上手だ。そういえばノアさんもそうだ。

・・・もしかして私が普通の人より一枚も二枚も下手なだけ？

「ああ、本物だ。それでいいだろう」

彼が口を開いてくれた。腕を解いて、リオさんのほうを向く。嫌々していることが丸分かりだ。

「他に何も言わないつもりね。なら、私にも考えがあるわ」

リオさんは話を止めて、広間へと歩き出した。自分の家の事はよく分かっているようで、この乱雑のなか、下を見ないでもつまずくこととは無い。

私たちもゆっくりと付いていく。

！？。あ、なんだただのゴミか。

「あれ、無い？」

机の中をガソゴソと無造作に探す。だんだんと顔が青ざめていく。やがてその手は止まった。

「お金が盗まれてる」

「え、!?」

「泥棒に入られたんだ。うわーやっちゃったー」

たまに言動が子供っぽくなるのは、この人の素のようだ。中身と外見が一致すればいいのに。
じゃなくて、

「何で気づかなかったんですか？」

「研究に没頭すると気づかないことがあるのよ」

と、頭に手を当て、どうしようかなー、という表情をしている。お金が無いのは厳しいよね。
これからどうするんだろう。

「お金にあてはあるんですか？」

「一応、買い物した時のお釣りが残っているけど」

適当な性格が幸いたせいか、ポケットの中には銅貨が3枚だけ残っていた。しかし、三枚では良くて二日しか生活することができない。

「明日の事は明日考えましよう」

それでいいの!?

「とりあえずご飯にしましょう。また『宿に帰ります』そ、そ、そ、うですか」

二度と三途の川へは行きたくない。横を見ると、彼の目は、よくやっただ、と言ってくれていた。

「また屋敷にくるのかしら？」

「いや、明日は用事があるのでな」

「そうですか」

「ありがとうございます」

そう挨拶をして帰ろうとする。辺りは寒く、早く暖かい所に入りたい。暗い道は人通りも少ないこともあり、誰も歩いていなかった。

「また明日」

リオさんは一言そういって、屋敷の中へと戻っていった。

「なんであんな嘘をついたんですか」

「長くいると別れる時に寂しくなるだろう」

「そうですけど」

彼は私の返事をまたず歩き出す。そんな彼の隣を歩く。

手がかじかむ。手に、ハァー、と息をかける。

満天の星空の下、私たちは宿へと帰っていった。

……重い

靈感など無い私は、いままで幽霊だのそういう類のものを見たことが無かった。

そんな私が、現在”金縛り”というものを体験中。

体が動かない。手や足は少しだけ動くけど、目が開かない。こんな感じは初めてだ。時間がたつと共に、徐々に目が開き始める。

「おはよ」

……夢を見ているようだ。いるはずのない銀色の髪が目に入ってくる。もう少し寝よう。

「ちょっと、目を閉じないでよ」

「……何しているんですか」

ぼーっとした頭でたずねる。銀髪の悪戯っ子はにこっと笑って、

「あなたを起こしにきたの」

何をしたいのかは分かる。なんでここにいるの？

「『また明日』って言うておいたじゃない」

何を言いたいか察してくれたようだ。こういう時、考えを分かって

くれるのはとてもありがたい。

「鍵……」

鍵をどうやって開けたの？と言いたかったけど口が回らない。

「ノアがね。『ミスはどこにいるの？』と尋ねたら、『部屋で寝ている』って言って言っつて部屋の鍵を渡してくれたの。それにしても彼起きるの早いのね」

面倒なことを。後できつく言っつておっつ。

「とりあえず退いて下さい」

手でぐいつと退かして、体を起こす。きゃ、つと声をあげてリオさんは私の上から降りた。

窓を開けると、朝日は半分だけ顔を出している。いつも早く起きてる私でも、さすがに早すぎると思う。

ガチャっという音と共に彼が入ってきた。

「リオ、これは良い剣だな」

と、彼は見たことのない朱い剣を持っている。右手に携える剣は、剣身が1・5メートルくらいある。

「斬ることじゃなく、突き刺すか、殴るよっつに使っつわ」
「他の剣も見てみたいのだが」

リオさんは首を振り

「他にあるのは観賞用の剣。見た目だけが良くて、すぐに刃こぼれするわ」

「ならばいい、見るだけ時間の無駄だ。だがどうしてこんな剣をくれるのだ」

「ああ、それはね、私を旅に連れて行ってくれるお金の先払いよ」

驚きの発言。これには私もびっくりだ。

「ミス、君が言ったのか」

「いえ、言った覚えはありません」

どうやら彼が言ったんじゃないようだ。

となると、残るのは、リオさんの独断という選択肢だけ。

「色々と教えてあげたじゃない。その恩を返さないつもり？」

「だが」

「別に旅の邪魔をするつもりは無いわ。ただ”あの事”がどういうことが確認したいだけ。言ったと思うけど、私は、魔法使いであり研究者だから、わからないことはほっとけないのよ」

何を言っても退くつもりはないようだ。ノアさんもそれを感じ取ったようで、どうしたらいいか迷っている。

「それに、あなたたちのギルドランクじゃ護衛任務受けられないでしょう」

「なんでわかるんですか!？」

「だって、あんな任務を受けるんですもの」

やはり鉄貨7枚というのは、法外な値段なんだ。

任務はきちんと良いのを選ぶほう。

「私のランクは”D”よ」

と一枚のカードを取り出した。たしかに名前の横に”D”と書いてある。ひらひらと見せびらかすような行動が、起きたばかりの私にとっては、すごくうざい。

「あなたたちは、移動手段が手に入る。私は”あの事”を研究する。ね、悪い話じゃないでしょう」

「確かに悪い話じゃないが」

「例え断られても、行く先が”たまたま”同じだったら、さすがに一緒に行ってくれるよね？」

それは断っても付いてくる、と言っている。こうなった彼女はそれでも意見を変えない。ノアさんは私の方を向いてきた。私はこくと頷く。

「危険な旅になるぞ」

リオさんに、警告のような最終確認を投げかける。

目を見据えて話す態度は、できることなら怖気づいて欲しい、と思っっているのを感じる。

「おもしろくなければ旅じゃないわ」

全く怖気つかず、逆に調子に乗らせた。開け放たれた窓から風が吹く。髪がフサアーとなびく。

銀色の髪は、太陽の光を受けて、さらにその輝きを増した。

「これからよろしくね」

「離れたくなったら、いつでもいいからな」

ノアさんと固い握手をする。私の方を向いて右手を差し出す。

「ミリスも」

「こちらこそ」

握手を交わす。すらりと伸びた指は、とてもしなやかで優しかった。ぎゅっと力強く握られる。暖かい手は、私の手から離れていった。

大人の女性だけど、たまに見せる行動がとても可愛らしい人、リオ・キャンゼフさん。

どこか魅かれる彼女は、魔法使いであり研究者。

新しい旅の仲間。

これからもっと楽しくなるんだろうな

¶ 15 味覚の真実（前書き）

夏休み、¶ 1から書き直すつもりです

「これからどうするつもりなの？」

「とりあえずギルドに行つてランクを上げようかと思つてます」

一階の広間に降りて、木のテーブルを囲む。朝食が来るまで、これから何をするか、ということ話を話すことにした。リオさんは、顎を組んだ手の上に乗せている。こんな動作はとても大人っぽい。

いや”大人っぽい”んじゃない”大人”なんだ。

「朝食をお持ちいたしました」

「ありがとうございます」「ありがとう」「すまない」

店員さんは会釈をして、また奥へと戻つていつてしまった。

「いただきます」「」

朝食は、冒険者の宿らしく肉やご飯が山盛りだった。海の近くだから魚かと思つたんだけど、それはどうやら偏見みたいだ。

「その前に行きたい場所があるんだけど良い？」

彼女は来た食事には一切手をつけず、私たちのほうをみている。

「(ゴクッ)、どこですか？」

そういうと、彼女は指を一本立てて

「ふ・く・や」

指を振りながらそう言った。

.....

「いらっしやいませ」

『あなたたちの服、ボロボロなんだもの。私も新しいの買ったかつたし』というのが、リオさんの言い分。

「とりあえず男はあっち行った行った」

しっし、と手のひらで男を追い払う。クスクスと笑いながらも、店員さんは笑顔で彼を奥へと連れて行ってくれた。

「さてどれにしましょう」

「リオさん、お金持っているんですか？」

私たちもあまり持っていないため、そんなに無駄遣いは出来ない。そういうとまるで待っていたかのように満面の笑みを浮かべて、

「ジャジャーン」

お金を見せてきた。硬貨は金色の輝きを持っている。

「泥棒は犯罪ですよ」

「盗んだんじゃないわよ。家の物を売ってお金に買えたの。大変だったのよー」

「そんなに一杯あつたんですか？」

「いや、お店の人を起こすのが」

店の人に同情する。こんな綺麗な人が朝早く尋ねられたら断れないだろうな。

この人の事だ。店の人が女性なら、泣いて営業妨害するに違いない。リオさんは、ごそごそと品定めをして

「これなんかいいんじゃない？」

「いや、動きにくそうなので遠慮します」

旅をするには動き易くないと話にならない。ヒラヒラとしたフリルの多い服は、旅向きではない。

「ならこれは？」

「こっちはどう？」

「これなんて良いんじゃない？」

着せ替え人形にされる私。着せ替えられた服は、とつくに十を超えていた。そのどれもが旅向きではない。手に取った服をかたっぱしから渡されているだけに思える。

「まだ、選び終わってないのか」

「あら、もう来ちゃったのね」

彼は白い長袖の服に、青いズボンを履いている。質素だが丈夫そうな服だ。

「じゃあミリス、これ」

渡してきた服は、赤い長袖に橙のワンピース。ノースリーブのワンピースは、とても動きやすそうで、なにより可愛い。

「なんですぐに渡してくれなかったんですか」

「ランクを上げた後、何処に行くかわからなかったから。あっ、店員さんこれ寸法合わせて」

私に渡した服と、別に持っていた服を両方店員さんに渡す。

「こちらにお越しく下さい」

リオさんに引かれ、私たちは店の奥へと入っていく。残された彼は、ポツンと佇んでいた。

「うん、やっぱり似合っている」

そういうリオさんは、袖がゆったりとした青い服を着て、白いシフオンスカートを履いている。綺麗というより優雅といったほうが正しいかもしれない。

「お値段は、全部で銀貨二枚となります」

いい服を買ったんだから当たり前だ。多少は高いと思うけど仕方が無い。

「ありがとうございました」

チリンチリン

「さあ、ギルドに行きましょう」

「ちよつと待って、これからアールド城に行くのよね？」

「アールド城？」

「え、だってそのつもりでその服を選んだんでしょ？」

「……」

「ハア、説明するわ。西に行くのとチルルに行ける、これは分かるわよね。東には行けないから残るは北か南。北は寒いからこんな服じや自殺行為に等しいわ。だから南にあるアールド城に行くと思ったんだけど。違うの？」

さすがノアさん、そこまで計算して服を買ったんだ。

「いや、丈夫そうな服を買っただけだ」

前言撤回。

「まあいいわ。アールド城に行くなら、人口が多いからそつちで任務を受けながらランクをあげたほうがいいわよ」

「ならばそうしよう」

太陽が高い位置にある。だいぶ時間を使ってしまったらしい。辺りは良い臭いが立ち込めている。

そろそろお昼の時間。

「火事だー！魔女の館が火事になっているぞー」

昼飯前のもう一仕事がありそうだ。

「ちよつとごめんなさい」
「すいません道を開けてください」

狭い道を広くして、私は野次馬の一番先頭へと行く。すぐ近くに
いるであろうリオさんの姿は人垣によって見えなくなっている。やっ
との思いで出ると、リオさんも出てくるのが見えた。

「燃えてるわね」
「燃えていますね」

家に住んでる本人が取り乱さないから、自然と冷静でいられる。
館はパチパチと音をたてて燃えていた。ガラガラと崩れ落ち行く屋
根。熱に耐え切れずに割れる窓。

「ちよつと、ひどい汗よ!？」

えっ!？顔に手を当ててみる。しらずしらずのうちに汗をかいてい
たみたいだ。その時、ぐらりと体が揺れた。

「顔も真つ青じゃない。ほんとにどうしたのよ」

リオさんに支えられて、何とか立っていられる状態。原因はわかっ
ている。けど拭いきれそうに無い。リオさんに助けられながら、無
くなつていく館を見守っていた。

「無くなっちゃった」

残ったのは無数の灰と、少しの瓦礫。人は去り、私たち三人だけがまだ見ていた。

「敵対していた人たちの仕業ですか」

「その可能性もあるけど、それよりも」

「契約していた奴らのほうが高い、か？」

「その通りよ」

悲しさなど無く、冷静な口調で話す二人。二人だけで会話が成立してしまう。こんな時、仲間はずれを感じるのがいやだ。

「敵対している組織ならば、リオ一人を殺すか拉致するかで良い。

火事など殺したのが不明になりそうな手段は好ましくない」

「逆に味方をしていた組織なら、私との繋がりが分かるとめんどろだ、と思えば全てを無に返す事が必要となるのよ」

物騒な言葉。自分以外はそういう人たちだと、改めて認識する。不安がよぎる。いつか命を落としてしまうんじゃないか。

・・・いや。大丈夫だ

「ミリス、どうかしたか」

この人が護ってくれるんだから。隣ではリオさんがニヤニヤしてい

る。どうしたんだろう。

「あーあ、まだ売れるものあったかもしれなかったのになー」

わざとすぎる大声で、おもわず、びくつ、つとする。

「そ、そういえば旅の荷物はよかったですか？」

「それは大丈夫。ここにあるわよ」

と腰につけていたポーチを突き出してくる。茶色のポーチは、小さく、服などはとても入りそうに無い。

「それじゃ行きましようか」

「良い女だなー」

「馬鹿止めとけ。お前なんか相手にされねえよ」

ギルドに入ったとたんそんな声が聞こえる。日常茶飯事らしく、リオさんは歯牙にもかけなかった。

「あつたわ」

掲示板で依頼を探すやいなや、すぐにそんな声が聞こえた。どうやら見つけたらしい。

ドスンと机の上に勢いよく置いた紙は、

《輸送任務：報酬銀貨5枚 人数三人以上

要：馬車の手綱の担い手》

輸送任務？物を届けるだけでいいのかな？

「これって『これをお願いします』も・の・を……」

考えている間に有無も言わず紙を渡す。あっ、この人ノアさんと同類だ。

新たに紙を受け取ってこちらに戻ってきた。

「午後一時にギルドですって。その前にお昼を食べてみましょう」

「ノアさん」

「……すまなかった」

「どうしたの？食べないの？」

side ノア

〈回想〉

「どこに食べに行きましょうか」

「君が望む場所で良い」

くいくいっと服が引かれる。見るとミリスがこちらをみている。どうしたのだろうか。

「またあの店に行くつもりですか」

頭を近づけると、リオには聞こえない声で話しかけてくる。なるほど、その件か。

「心配は無用だ。あの店以外だということは今から言つつもりだ。さすがに二軒とない味だろう」

「なら、いいです」

「何やってるの？」

先を歩いていたりオがこちらを見ている。ミリスはすぐに離れ、なにくわぬ顔で歩く。

まあ、明らかにばれてはいる。

「なんでもない。それと前とは別の店にして欲しい」

「ふーん。わかったわ」

横を見るとミリスが指を立てていた。ふむ、これでいいのか。

「ここにしましょう」

見ると大通りに面しているレンガ造りの店がある。店内には昼前なのか、客で賑わっている。これなら信用できそうだ。

「いらつしゃいませ」

「あなた新人さん？店長を呼んでくれるかしら」

「お名前を言ってもらえますか」

「リオって言えばわかるわ」

少々お待ちくださいと言つて、店長を呼びに行つてしまった。待たされている間、続々と他の人が入ってくる。

「お久しぶりでございます」

「お久しぶりです。」いつもの”を三つ貰えますか”

「もちろんでございます」

とても丁寧な喋り方だ。こうして見ていると上流家庭で育ってきたと思える。窓際の席に案内される。まるで取つてあつたかのように空いていた。

”いつもの”？

周りを見渡してみる。他の人はおいしそうに食べている。普通の料理だろう。普通の料理と思いたい。

普通の料理であつて欲しい。

「お待たせいたしました」

〳〵回想終了〳〵

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6688/>

暗き望み

2010年10月14日19時35分発行